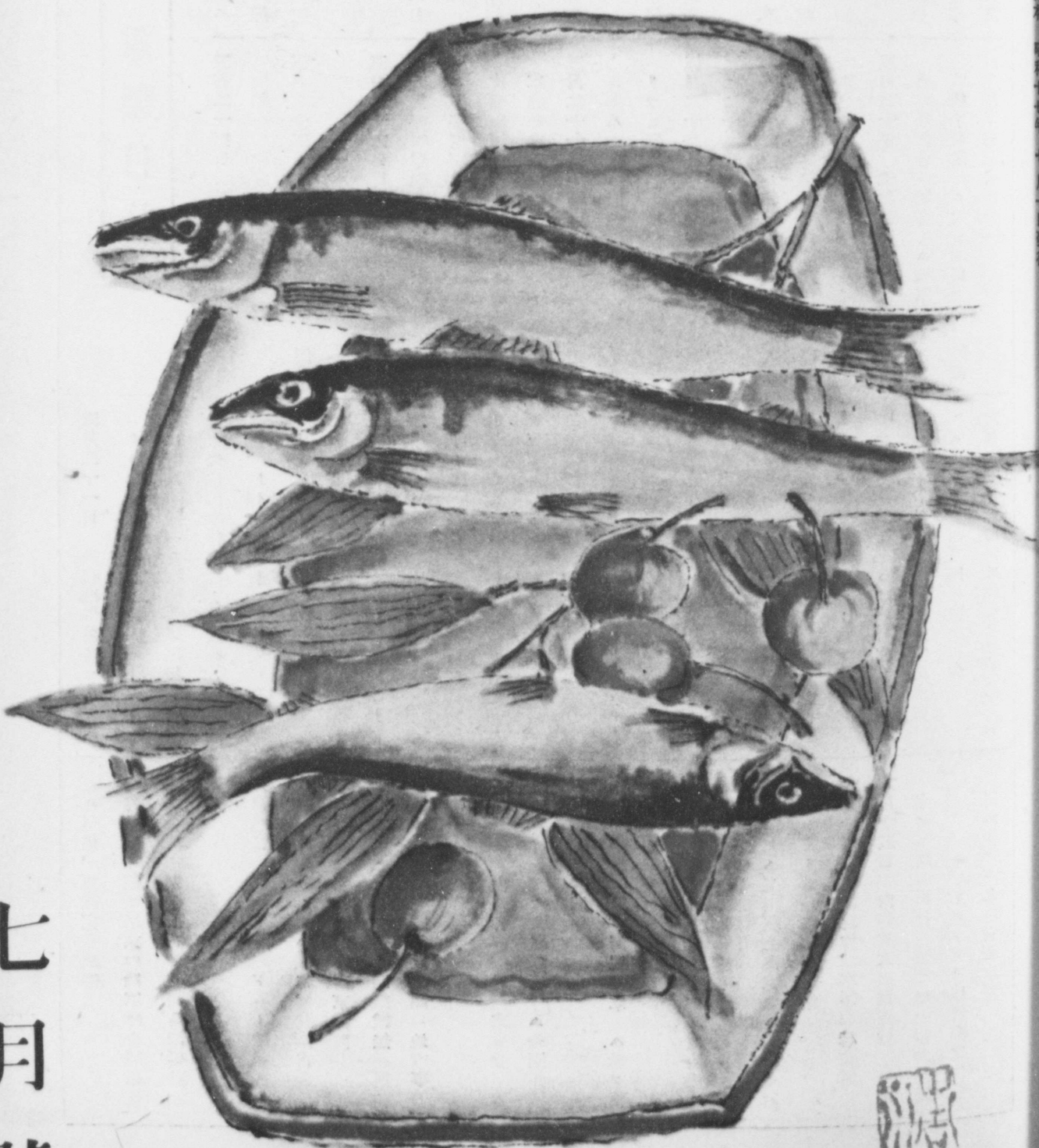


# 刑政月刊



七月號



昭和十七年六月二十八日印刷  
 昭和十七年七月一日發行

昭和十七年 重要日誌

五月十六日 金子堅太郎伯薨去 △金融事業整備令公布施行 △國際諜報團事件發表 △小スンダ列島裁定作戰成る

五月十八日 大政翼賛會事務總長更迭 (後藤文夫氏新任) △建國會、大日本黨解黨 △米、物價停止令實施

五月十九日 陸軍航空司令部新設(六一施行) △翼賛議員同盟解散、國粹大衆黨解黨 △東亞民族研究所創設決定

五月二十日 翼賛政治會創立總會、阿部大將總裁就任 △水産統制令公布實施

五月二十一日 大東亞建設審議會、文教政策、人口政策答申案決定 △津田博士の出版法違反事件判決 △山東共産軍殲滅戰開始

五月二十三日 東方會解黨(思想團體として存続) △全國金融統制會創立 △臺北に臺灣憲兵隊司令部新設

五月二十四日 晉冀豫邊區に剿共作戰開始

五月二十五日 全國司法長官會同開催 (三十日まで)

五月二十六日 高松宮殿下滿洲國建國十周年御慶祝のため東京御出發 △十七年度國民動員計畫決定 △日本文學報國會創立總會 △開戦以來海軍綜合戰果發表

五月二十七日 第三十七回海軍記念日 △第八十臨時議會開院式 △ハイドリッヒ獨保護領總督代理狙撃重傷

五月二十八日 蘭谿、金華完全占領

五月二十九日 第八十議會閉院式 △國民政府訪日特派大使褚民誼氏入京 △小磯大將朝鮮總督に就任 △南大將、泉二新熊氏樞密顧問官仰付

五月三十日 鐵道軌道統制會、組合金融統制會創立總會 △獨軍ハリコフ戰終了發表 △大日本婦人會、總裁宮殿下奉戴式舉行

五月三十一日 我特殊潛航艇マダガスカルにて英艦二隻撃破、シドニー港に潜入敵艦一を撃沈 △國民政府、中央儲備銀行券による通貨統一斷行、關係諸法布告 △南支に新作戰開始 △關門國道隧道貫通

六月一日 勞働者年金保險全面的施行 △東印度軍政部私有地撤廢國有地編入を命令 △從化占領

六月二日 資金統制・貿易計畫決定 △工業規制・建設地域暫定措置決定 △メキシコ對樞軸宣戰布告 △米、重慶武器貸與協定調印

六月三日 高松宮殿下御歸國 △全國刑務所長會同(六日迄)

六月四日 ビルマに軍政施行 △我潜水艦シドニー沖に活躍 △我空軍ダツチハーバー急襲

六月五日 内閣及び各省に委員設置制發表 △ミッドウエー海戰、米空母二甲巡一撃沈 △中間行政機關開設の根本方針發表 △撫州完全占領 △米、羅勃甸三國に宣戰布告

六月六日 近海にて敵潜水艦撃沈發表

△衢州、東郷完全攻略

六月七日 開戦以來の陸軍綜合戰果發表 △アリニューシヤン列島諸要點攻略

六月八日 我潜水艦シドニー、ニューカッスル砲撃 △崇仁、宜黃占領 △張滿洲國特派大使南京訪問

六月九日 安藤翼賛會副總裁無任所相に親任 △中間行政機關「地方事務所」決定

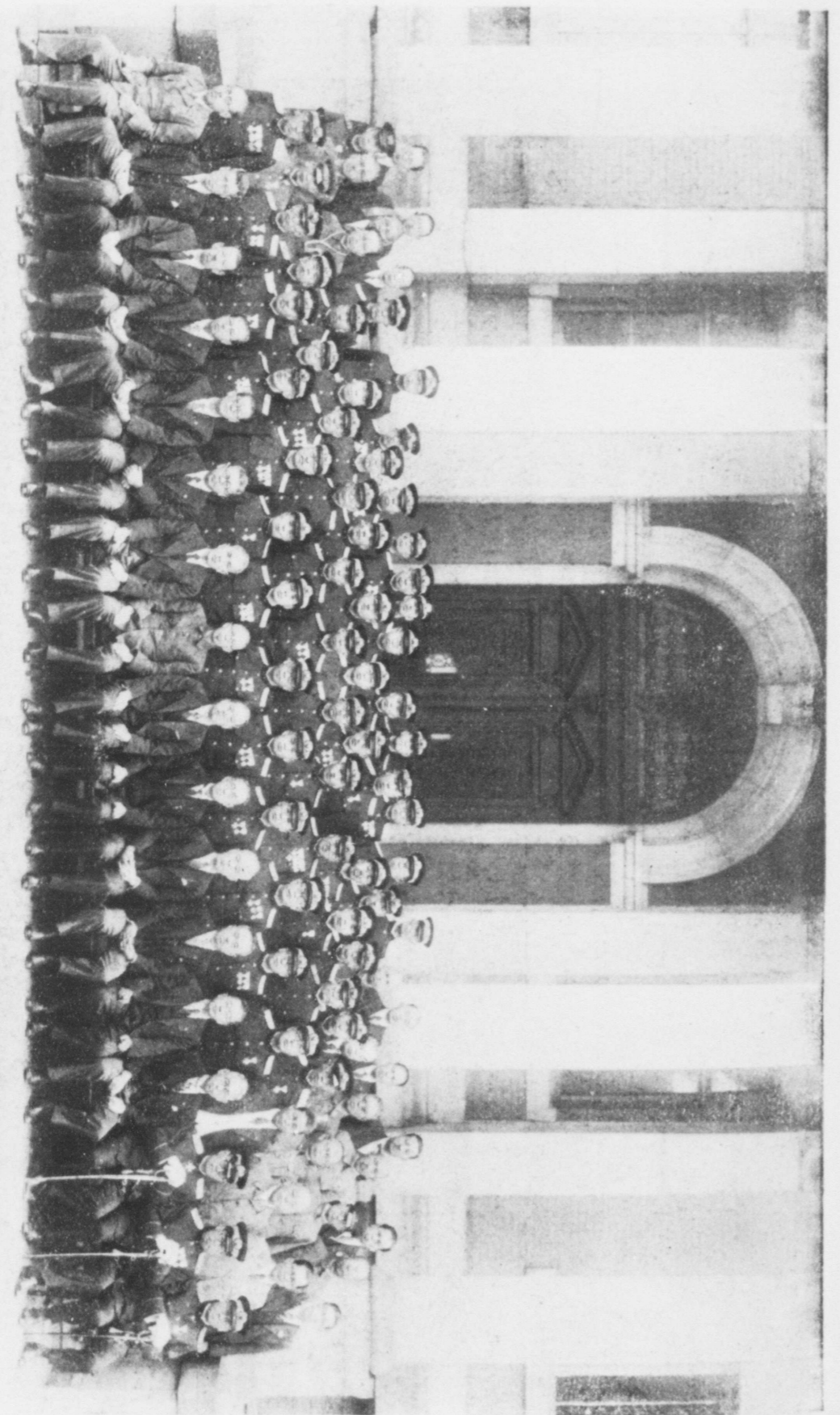
六月十日 内閣各省委員正式發令 △翼賛會全面的改組斷行 △全國保護觀察所長會同

六月十一日 英ソ同盟成立 △米ソ協定成立

六月十二日 商工省企畫局新設決定 △十七年度交通動員・電力動員計畫決定 △玉山完全占領 △獨軍セバストポリ軍港總攻撃開始

六月十三日 翼政會、本部機構整備

六月十五日 内務省大異動斷行 △東京市議選舉施行(棄權率一割六分五厘) △バンコックに印度獨立大會開かる △上陸完全攻略



影撮念記同會長所務刑



# 月 刊 刑 政

近頃、刑の本質をめぐる論争の諸點のうち特に目につくことは、教育刑、應報刑の主張に加ふるに、「眞の意味の教育刑」といふ主張が、新舊兩派の學者から、意識的にか無意識的にかは別として、唱へられたことである。かういふ言葉が用ひられてゐるだけで、まだその内實が與へられたわけではないが、われわれとしては行刑の反省の上一つの資料を見出したものとして、注目せぬわけにはいかぬ。

遮莫、最近に於ける刑務事故の性質及び量の變化も亦、これを充分に反省せねばならない。殊に逃走のそれは銃後治安の維持の上からもこれが絶滅を期せねばならぬ。しかし、逃走事故の絶滅といふものは、決してそのみを目標として専心これに當るといふことだけでは、到底期待せられるものではない。行刑といふものに於ては、何時ものことながら、全體の活動が有機的に繋がりをもつことを必要とする。蓋し、それは「一人」を處遇する上から極めて當然のことである。

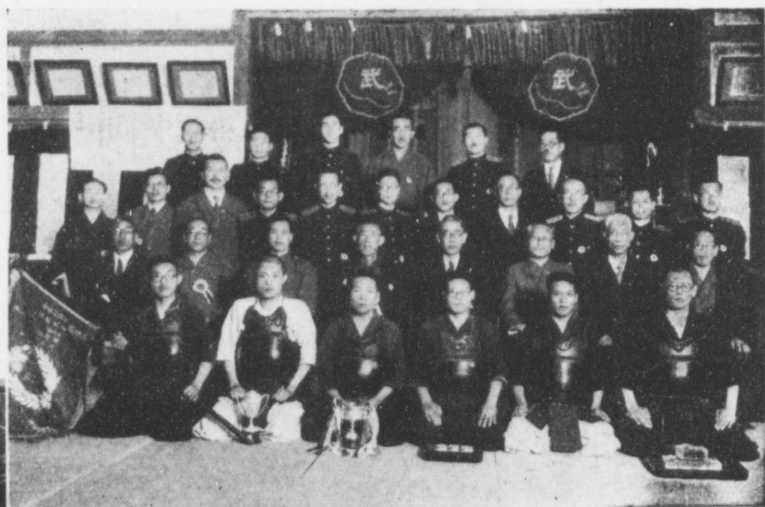
そこで、反省されなければならぬことは、行刑の各般にわたつて良心に従ふて眞摯な營みが爲されてゐるかといふことである。學者の所謂眞の意味の「教育刑」といふものも案外この點を衝いてゐるのかも知れない。勿論、われわれは全國の刑務官が内心職域奉公の精神に燃えてゐることを疑ふものではない。しかし、その日常に於て世の思想や生活の轉換に當つてその從來保持した行刑の自信を失つたのではないかを憂ふことである。今こそ、數十年の經驗の上に新しい事態を眞摯に考へ且つ速に實踐しなければならぬ時期である。

これについては事務的なこと、制度的なことにも改正の迫まられてゐるものがあるであらう。しかし、それらの改正にもまして、必要なことは刑務官が嘗て把持して間違ふことのなかつた「親心」に對する自信を、再び新たにすることである。「親切週間」といふものが時局下の民心をやはらげるために企てられてゐる。刑務界に於ても「親心」の振起が爲されねばならぬと考へるのは決して筆者ばかりではあるまい。

(小川生)



刑務所長會同  
隨行員記念撮影



第十五回武道大會  
優勝記念撮影

劍道第二區



同  
柔道第一區

目次	主 張	（一）
	所長會同訓示・注意・指示	（二）
	皇國を擁護した水戸學の生命	（三）
	報恩と職責	（四）
	獄中における陸奥宗光	（五）
	感 想	（六）
	すいといふのは梅干一つか	（七）
	監獄改良 留岡幸助翁	（八）
	東亞共 留岡幸助翁	（九）
	未だ生温い戦時色	（一〇）
	全 國 武 道 大 會 觀 戰 記	（一一）
	明暗の境	（一二）
	友 道	（一三）
	監獄法新舊比照	（一四）
	視 察 表	（一五）
	規 則	（一六）
	表紙 桑重清	（一七）

### 所長會同 訓示・注意・指示

#### 岩村司法大臣訓示

本日茲に各位を會同して所懐の一端を述ぶるは、私の欣幸とするところでありませう。

一、大東亞戰爭開始以來大稜威の下我が皇軍將兵の擧げましたる赫々たる戦果は、有史以來未曾有のことに屬しまして、早くも南方諸地域に於て大東亞建設の大業が創められましたことは、各位と共に衷心慶祝に堪へないところでありませう。然しながら此の大東亞建設のことたるや前途甚だ遠慮であり、其の途上幾多の障礙と困難との横はつて居ることも亦勿論であります。故に各位は其の職域に於て慈々奉公の誠を竭し、以て國內治安の完壁を期し、上聖恩の萬一に應へ奉ると共に、直接建設に執筆する方面に對しまして亦十分の協力を爲されるやう御盡力を煩はし度いのであります。

安の確保を目標として制定せられたものであります。現に刑務所に收容中の者が釋放後更に此の法律に觸るる可能性が最も多いのであります。彼等の再び法に觸るることを未然に防ぐことに完壁を期し得るならば、銃後の治安は正に確固たるものとなるのであります。各位は此の法律の眞精神を十分に把握して各所の收容者等に對し遵法精神の昂揚に努められ、一人の再犯者をも出さざらんことに渾身の努力を致され度いのであります。

三、申す迄もなく、行刑は國內治安の確保を圖ると共に他面犯人の教化善導を目的とするものであります。之が爲には先づ善導の任に當る刑務官その人の人格を完うすることを肝要とするのであります。刑務所長より看守に至る迄一人として不正不信なる行動に出づるが如きことなきやう躬ら範を垂るるに非ざれば、受刑者の善導といふが如きは得て望むべからざるところであります。

最近刑務所官吏の中から、二、三其の職を汚したる者を出しましたことは遺憾の至りでありまして、之が爲に行刑の威信を損傷し、受刑者教化に悪影響を及ぼすべきことは頗る多大であります。各位は今後一層深く自らの修養に勉められ部下の人格向上に十分なる注意を加へて頂き度いのであります。假令應召等による人員の不足或は缺員の補充に關する困難等がありまして、平時に倍する勤勉と訓練教養とに努められまして、爾今一人の違反者をも出さぬやうに格段の御配慮を願ふ次第であります。

四、刑務作業は、從來主として本人の職業、將來の生計等を勘考致しまして専ら其の獨立自營の資質、能力を養成すると共に、他面刑務所經營の自給自足の目的を達成することに努めて来たのであります。支那事變勃發以來、我が國の經濟體制は専ら聖戰目的の完遂に向けられて来たのであります。個人經濟的な作業機構より全體的作業機構に移すべきことは刑務作業の上にも及んで来たのであります。刑務作業の上には於て全體的作業機構を採りますことは受刑者に奉公の精神を昂揚せしめるのであります。今日我が國の刑務作業が民業を廢して専ら軍需作業に向けられ、他面、食糧増産、資源増強を意圖して、或は交通不便なる山岳を開拓し、或は荒蕪地を墾闢する等收益を顧みずして國策に順應して居ります。

が、本省に於ては今年度各所に一名の委任教師を配置して益々其の效用を發揮することを企圖致して居る次第であります。少年刑務所長は勿論其の他の各位に於かれても直接間接の御協力を願ひ度いのであります。

五、最後に拘留所の獨立に付て一言申上げ度いと思ひます。昨年度に於て大阪、京都、神戸の三箇所に於て夫々拘留所を獨立せしめたのであります。其の趣旨は全く判決確定者と罪責未確定者との本質の差異を明白に致し、以て刑事訴訟法上の刑事被告人の地位を明かにするに外ならないのであります。行政上其の他の點に付きましては他の刑務所と互に協調連絡を執り有無相通すべきことは勿論であるにも拘らず、動もすれば其の獨立の趣旨を誤解して協調を缺くの憾なしとせざるやにも存せられるのであります。之亦各位に於て特段の御配慮を願ひ度く尙同地域の刑務所長の長は拘留所に事故等が起りました場合には、格段の御助力を與へられるやう切望して已まない次第であります。

#### 正本行刑局長 指示事項

一、本日皆様の御會同に際りまして行

刑務所の諸般に互り私の考へて居りまする點を申し述べる機會を得ましたことは私の非常に喜びとするところでありませう。殊に私は嘗て長年に互り皆様と共に行刑の事に當つて居りました關係上全く打ち解けた氣持を以て發言することが出来まするし又皆様に於かれても私の不遠慮を篤と御承知の事で御座いますから萬一不用意なる言辭等がありまして十分御寛恕を賜はることを信ずるのであります。

二、次に私は支那事變以後今日の大東亞戰爭にかけて多數の同僚諸君が應召せられまして皇國の爲に血みどろの奮戦を續けて居られる事に對し滿腔の感謝の辭を捧げるものであります。殊に此等同僚諸君の中から幾多の勇士が大東亞建設の人柱となられましたことに付きましては殆んど感謝の言葉さへなく衷心賑福を禱る次第であります。

三、諸君は之より行刑の事に關して申し上げるので御座います。第一に和の行刑といふことに付て述べて見たいと存じます。以和貴無忤爲宗といふ聖德憲法の御精神は、行刑のやうに人を取扱ふ職務の上に於きましては全く根本精神として取りあげられねばならぬのであります。然るに、行刑は一區劃内に於て仕事が行はれます關係上自然視野が狭くなり知らず知らずの中に

#### 大森司法次官 注意事項

命に依りまして、行刑事務に關する四、五の點に付て、各位の御留意を煩はし度いと存じます。

一、先般來實施の行刑非常準備計畫の成績に付きましては、深く各位に感謝する次第であります。即ち何等の事故なくあの大移送を完了致しましたことは、全く各位の獻身的御盡力の結果でありまして、特に各刑務所間の相互聯絡に缺くところのなかつたことは、實に喜ばしく存するのであります。銃後の治安の爲に、將來に於ても之を繰返すことがあるかも知れないのであります。各位は今回の經驗を基として、更に一層の成果を擧げられるやう御留意を願ひ度いのであります。

二、今日の刑務作業が國策に順應致すべきは勿論でありまして、之が爲には經營の合理化を徹底する必要がある程であります。此の度非常時作業處理規程を定め業種の統合を斷行致しました

4 示

蝸牛角上の争を起し易くなるのであります。長官は動もすれば部下を偏愛憎悪するやうになり、部下は又長官に誦諛を競ふやうになり勝ちであるのであります。恐らく刑務所位朋黨比周の出来易い場所はないと存するのであります。眞剣に行刑を遂行して行く爲には戒護も作業も教育も醫務も一體同心とならねばならぬのに拘らずお互が行刑の中心はわれにありと競ふ場合が多いのであります。かやうな精神がありまると今日の如く統制を根幹として營まれて居ります非常時行刑を遂行する上には極めて大なる障礙となるのであります。

四、先刻來司法大臣及司法次官より職員の清節の點に付屢々御訓示が御座いましたが、最近の行刑に於きましては作業の運営が頓に擴張されました結果外部商人との交渉が頻繁となりまして動もすれば誘惑の魔手が差し延ばされる處れが非常に多くなつて參つたのであります。加ふるに近時人的資源は漸く窮乏を告げまして下級官吏の素質も亦従つて低下致しまして誘惑にかかり易い處れがあるので御座います。現にかかる誘惑にかかつて許迫を受けるに

至りました二、三官吏のありますこととは實に残念至極のことと申さねばならぬのであります。行刑の目的と致し、まする改過遷善も一人の役人が法を破ることによつて竟に期待を失はねばならぬこととなることを思ひますとき吾人は此の問題を輕々に扱つてはならぬので御座います。何卒各位はかかる不詳事を以て職員の素質低下或は外部の誘惑等に責を歸することなく熱心部下の精神訓練に努めて以て此の禍根を絶滅して頂き度いのであります。

五、大東亞戰爭の勃發を機會として行刑の非常對策は愈々具體化せられたのであります。而して此の非常對策計畫は只今次官より御注意のありました如く帝都を始め大都市の治安を防護することが主眼であるのであります。その移送の途上に於て或は逃走が起り、移送を受けた者が不満を抱いて搔擾を起すが如きことがありましたらば此の計畫は反て禍であるのであります。幸にして今回大移動計畫を斷行したるに拘らず一人の逃走者もなく、又一人の不平等の出でないといふことは全く一には各位の懸命の御努力の賜でありまると共に收容者等が時局を認識して

5 示

民業の壓迫といふ問題が解決されて來たこととあります。六には刑務所内に失業といふことがなくなつたこと等に歸因するのであります。かやうな状態下にありますのが故に當局は所謂作業統制を強化致しまして先づ民間よりの受負及委託作業を避けて専ら國策に順應せしむべき大計を樹てたのであります。従來の如き個人の技術能力等を向上せしむる方策に従ふよりも協同精神に基く作業の運営に力をそそぐといふことがもつと必要であるといふ考へ方の下に今日の作業經營は先づ陸海軍需作業に向けらるべきこと、食糧の増産に向けらるべきこと、國防資源の増産に向けらるべきこと等の原則が採られる様になつたのであります。軍需作業の盤に付ては軍機に關するので詳細に申上げる自由を持たないのであります。が、その他の點に付きまして刑務所所屬耕地、空地利用及借入耕地を作付可能の状態にまで致しまして昭和十六年度の作付延面積は八六、一町歩就業延人員二十一萬六千九百三十四人一日平均一千一百人に達した次第であります。て、食用作物は米穀、飼料作物、特用作物其の他合計一千九十七萬七千八百

十六疋、牛馬、羶羊、家畜類合計約三千五百となつて居ります。尙今日繼續して居ります耕地擴充計畫は網走刑務所二七五町歩、松江二五〇町歩名古屋百町歩札幌七五町歩及高知刑務所の三百町歩合計一千町歩で御座います。特に高知のそれは製紙原料三種栽培を目的として居るものであります。又海洋方面に於きましては小田原少年刑務所の漁撈を従來より飛躍せしめまして今夏期間を北海漁撈に従事せしめまして五月より八月までの期間に約二十萬圓の鱈漁業に成果を納めたい計畫を實施したのであります。其他の作業に付きまして可及的に業種の統合を圖り一ヶ所の利便とか、成績等を超越せしめ専ら國家的見地に立たせることになつたので御座います。要するにかかると作業の大轉換は各々傳統的なる刑務所作業經營觀念を拂拭せられ、統制刑務所長を中心として協力一致の體制を確立されねば成功するものでないものであります。今日作業統制は頗る効果を擧げて居るので御座います。時に統制に足なみをそへない方もあるやに聞くので御座います。どうか自所の利便利益等を犠牲にして統制作業の眞



皇國を擁護した 水戸學の生命(二)

高須芳次郎

(三)

幽谷以後、水戸政教學を發展せしめる上に大きい功勞があつたのは、會澤正志齋で、その著『新論』は、文化八年に書きまとめられて、後、印行さるゝに及び、全天下に深い感激を與へた。

今日、『新論』の内容について、まだ之を知らない人々が寧ろ相當に多いやうに見受けるが、皇政復古、明治維新を促した代表的文獻として、幕末には之を讀まぬ武士が殆どなかつたといはれてゐる。

正志齋が『新論』を書いたわけは、イギリスの捕鯨船が文政七年、常陸大津濱を騒がした事などにより、彼等が日本の領土に對して野望を抱くことを衝き止めたからである。それに今一つは、幕府の機構が大分ゆるみ、諸侯の財政難に悩むものが多くて、土心頹廢し、どうしても、一革新を加へねばならぬ必要を痛感したからであつた。

そこで正志齋は、上下の目ざめを促すために『新論』で元づ日本國體の尊嚴な所以を明かにして、古來、祭祀を重んじて、皇道を發揚したことを説き、次に國防充實の必要を高調して、西洋の軍事科學に關れ、それから生活の安定を保

つ上から米穀政策に及んだ。そして尙ほ富國強兵の意義を力説し、日本の國基を鞏固に保つべき旨に論及してゐる。

惟ふに『新論』の主眼は國體明徴の上にあつた。『新論』以前に出た書で、正志齋のやうに詳しく、國體を論明した著述はない。蓋し當時、何より必要なことは、皇國日本が國體上、萬國に優れ、道義建國の精神において、世界を指導すべき本質を持つといふ點にあつた。『新論』はこの方面に特に力を入れたので國民的自覺を喚起す上に少からず役立つた。

水戸政教學は、かく『新論』の出現と共に一飛躍を爲したが、更に水戸烈公(徳川齋昭)が文政十二年、三十歳で藩主となり、藤田東湖、戸田蓬軒らの人材を重用するに及び、一段の發展を示したのである。

烈公は平生、義公に私淑して、文武の道にいそしみ、殊に農政について深く研究した。その藩主となる前、農民の辛苦に同情して、毎日、食膳に向つたとき、自製の農人形の前に感謝の意を表した後、箸を執つた。かうした心がけの人であるから、内政、外交についても十分に注意し、三十歳で藩主となつた際には、常に考へてゐるところをどしどし實行に移したのである。

かの水野越前の天保改革は、その獨自の考へから出たやうに思はれてゐるが、實は、烈公の藩政改革のあとを眞似たのである。世人は、天保改革のことに眼を聳るが、その範を示したのが烈公であることを知らない。

蓋し當時各藩共、長い間の因習に囚はれて積弊が山積する有様で、勢ひ思ひ切つた改革を斷行しなければならなかつた。烈公が藩主として、最初、藩内の改革に著手したわけは勢やむを得なかつたことにはかならない。それは峻厳にすぎたところがあつたが、その位にやらねば、肅正の實を擧げ難かつたのである。

(四)

烈公が先づ藩政を改革したのは、天保元年のことで、その年正月、藩臣に書を與へて、文武の道を奨励し、言路を開くべき旨を傳へ、政教一新に努力するの意を明かにした。次に烈公は、他の諸費用を節して、軍事方面の充實を計るために、儉約を命じ、老人以外は、すべて綿服を着用すべきことを勧め、正月の門松、初午、端午などの儀式を簡易にするよう、特に注意した。その他、上巳雜飾についても、奢侈に流れぬよう、嚴命したのである。

以上は、烈公の政治改革の一端で、その全貌ではない。烈公が最も力をつくしたのには、(一)北門經營、(二)政教革新、(三)國防充實などの上にある。その他、外交振肅についても、少からず盡力した。

世人の中には、ともすると、烈公が始終、攘夷を唱へたので、保守・頑固の

人物であるかの如く想ふものが今尙ほ少くないやうだが、烈公は保守ぎらひ、頑固ぎらひで、皇道主義に起つた積極的進歩主義の政治家だつた。いづれかといふと、藤田東湖らは、烈公が餘りに急進的に馳せるので、それを適當に喰ひとめるため、寧ろ苦しんだ位である。

従つて、烈公の考へ方も、著眼も常に時流を抜き、時代に先驅して、清新、發刺たる趣があつた。世人は、先づこの一事を念頭に置くの必要がある。かうした人であるから、眼を日本の全體に注ぎ、對外關係にも十分に注意して、その經綸を打建てた。烈公が當時、何人にも先んじて北門經營に當らうとしたのも、つまり、ロシア人の南下を抑へ、日本の皇威を宣揚するためだつた。

その考へは、『地方未來考』のうちに書き残されてゐるが、烈公は夫人登美宮(有栖川家から御降嫁になつた)及び公子らを伴なうて北海道に渡り、屯田兵を指揮して、開拓に従事すると共に、國防上、ロシアの勢力を喰ひ止めるつもりだつた。蓋し松前の一小藩にさうした重大事に當らせて置くのは、國家の不利だと固く信じたのである。

その時分の北海道は、寒さと淋しさで、誰も行かうとするものがないほどだつたが、烈公は國家のため、家族をもひきつれて、出かける決心をしたのである。そしてその旨を藤田東湖に告げて、幕府當局と折衝せしめたところが、幕府の有司は餘りに眼光が狭小で、烈公の遠大な計畫を理解することが出来ず、却て烈公が野心を抱いて、北門經營に當らうとするのではないかと邪推し、その實現を拒んだのである。

之につき、烈公は、別に藩内の豪商、大内清衛門を北海道に内密に特派し、ロシヤ、樺太などの形勢をも探らせて、他日の發展に資すべく、努めたが、結



# 報恩の職責 (一)

小林 一郎

局、その苦心も水の泡になつて了つた。

米英に對する宣戰の大詔を拜してから既に半歳以上を過ぎた。此の間に於ける吾が陸海軍の活動は世界の戰史上に比類を見ざるものである。吾等は遠からずして米英兩國を屈服せしめ、開戰の目的の達成せらるべき日の到來せんことを確信して疑はぬ。而して又吾等日本國民の責任の更に重きを加ふることを覺悟して居なければならぬのである。此の半歳餘の間に吾が軍の目覺しい戰果を收め得たのを知つて、東亞に於ける十億の住民が吾が國を信頼する情を強めたことは非常なるものであるが、愈々米英兩國が屈服した曉に於ては此等十億の人々は一から十まで吾が日本に依頼し、吾が日本の指導と保護に依つて今後眞に意義のある生活を送りたいといふ希望をもつやうになるに違ひない。英國は三百年來、米國は百年來此の東亞に於て横暴の有らん限りを盡し、東亞諸國の住民を苦しめて、其の得たる所を以て自己の國を富ますことのみを力を用ひて來た。而して東亞諸國の人々は米英人等が自分達よりも遙かに優秀なる國民であることを盲信し、到底敵し得ぬものとあきらめて今日に及んだのである。

然るに同じ有色人種の中から日本といふ國が起つて、僅かに半世紀ばかりの間に非常なる發展を示し如何なる事に於ても白人の諸國と比べて遜色のない迄になつたのを見て、東亞諸國の人々は漸く白人萬能の迷夢から醒めかゝつたのである。併し何んとしても米英の兩國は世界に於ける屈指の強國であるから、日本が此の兩國を一度に相手として戰つて勝利を制することが出来ようとは、何れの國でも夢にも思はなかつた。ところが開戰以來此の目覺しい勝利が續いたので、諸國の住民は吾が日本國民の眞價を初めて知り、其の信頼の情を幾倍か強めた次第である。況して米英兩國が愈々吾が國に屈服するといふ事になつたらば、彼等諸國の吾が國に對する信頼は絶對的のものになるであらうが、それと同時に彼等は其の將來に就て實に大なる希望を懷くやうになるであらう。彼等は必ず斯う感ずるであらう。『有色人は白人より劣つた者だといふ、彼等白人の宣傳を信じて居たのは、まことに恥かしいことであつた。日本もツイ近頃までは吾等と同様に白人の國々から輕侮されて居たのである。然るに日本は努

力に努力を重ねて非常なる進歩を遂げ、終に米英といふ世界の二大強國を屈服せしむることが出来た。吾等も此の活きた教訓に依つて覺醒しなければならぬ。吾等も今後の努力次第で必ず白人の國々を凌駕するまでになれるであらう。日本は吾等の活きた手本である。今後吾等は日本の指導に依つて大に奮發しなければならぬ」と。

此の事をいふのである。

斯うなつてから萬一にも吾等日本國民が東亞諸國民の期待に背き、彼等をして失望せしむるやうな事があつたならば、實に恐るべき結果を來すであらう。東亞諸國の人々は『日本は戰爭に於て世界第一の強者であつた。政治に於ても、商工業に於ても、學問文藝に於ても必ず白人の諸國より遙かに優秀であらう。吾等は凡てに於て日本を手本としなければならぬ』といふ考へで、吾が國民の一舉一動に深き注意を拂つて、吾が國民の言行一切を觀察し研究するであらう。即ち東亞十億の人々の眼が皆盡く吾等に注がることになるのである。斯うなつて後に萬一にも吾等日本國民の中に其の職務に不忠實な者があつたり、私利を圖つて公益を忘るゝものがあつたり、或は戰勝の餘威を藉りて他の國民を輕侮するやうな者があつたりしたならば、『日本人は戰爭に強いだけの國民である、其の他の事に於ては一切手本とするには足らぬ』といふ聲が次第に昂まつて來るであらう。さうして一たび打碎かれたる白人優秀説が必ずまた擡頭して來て『矢張り白人にはかなはぬ、白人の指導に依るより外はない』といふ考へがまた次第に勢力をもつて來るであらう。其の結果として獨り吾が國が東亞の指導者たる地位を失ふのみならず、東亞諸國の住民の奮發心もこゝに大頓挫を來して、再び白人横暴の時代が實現せらるゝことになるであらう。吾等は斷じて漸ういふ結果を見ぬやうに、今日に於てシツカリと吾等の覺悟を定めて置かなければならぬのである。嚴密なる意義に於ける『銃後の護り』とは實

吾等は反動力の恐るべきものであることを充分に意識しなければならぬ。東亞諸國の人々は米英の力に久しく壓伏せられ、多くの困苦を受け多くの屈辱を忍んで來た。其の反動として『日本を頼りとして白人の羈絆を脱しよう』といふ希望が火の如くに燃え上つて來て居るのである。然るに若し日本が頼りにならぬといふことになつたなら、又其の反動として非常に強い失望の感じを生ずることになるのは想像に難くない。萬々一にも斯ういふ結果になつたら、吾等如何にして此の聖戰の犠牲となられた人々の英靈に謝することが出来やうか。此の戰果を全うするために全力を打込むといふ覺悟があつて、初めて英靈を祭ることも出来るわけである。出征軍人を慰問するとか、其の家族の人々に保護を加へるとかいふことも勿論大切な事ではあるが、それのみで所謂『銃後』の責任が全うされたものと思つてはならぬ。戰後に於ける東亞十億の人々の信頼を空しくせず彼等を立派に指導し得て『成るほど日本國民は立派な國民である。日本に信頼して居れば今後も永く安心である』といふ確信を彼等に與へ得て、そこで初めて戰果が全うされるのである。そこで初めて此の聖戰の犠牲となられた人々に對する吾等の感謝の念を完全に表現することが出来るのである。吾等日本國民は共に此の覺悟を固め、共に此の責任を分擔しなければならぬのである。

吾等の祖先は此の尊い皇國を護るために心身一切の力を傾け盡し、各自の責任を全うすることに努めたものである。勿論皇國の發展は御歴代の皇室の御徳に依るものであるが、又一には吾等の祖先の努力に依る所が少くないのである。されば明治天皇には此の事實を明かに御認めになり、明治二十二年の紀元節に當つて憲法を御發布になる際に特に勅語を御頒發になつて、

惟ふに我が祖我が宗は我が臣民祖先の協力輔翼に倚り、我が帝國を肇造して無窮に垂れたり。此れ我が神聖なる祖宗の威徳と、並に臣民の忠實勇武にして國を愛し公に殉ひ、以て此の光輝ある國史の成跡を貽したるなり。

と仰せられ、なほ今後に於ける吾等の努力を御期待になつて、我が臣民は即ち祖宗の忠良なる臣民の子孫なることを回想し、其の朕が意を奉體し朕が事を獎順し、相與に和衷協同し、益々我が帝國の光榮を中外に宣揚し、祖宗の遺業を永久に鞏固ならしむるの希望を同くし、此の負擔を分つに堪ふることを疑はざるなり。

と仰せられた。まことに吾等としては斯る御言葉を拜承することを無上の光榮と心得なければならぬ次第である。實際吾が日本の陸海軍に屬する將士の方々は、此の勅語に答へ奉るのに充分なる働きをして居るゝのであるが、吾等一般國民も固より此の光榮を全うし得るだけの覺悟をもたなければならぬ筈である。

此の憲法發布の際に於ける勅語の御精神は、即ち御歴代の天皇の御精神であると拜察しなければならぬと考へる。神武天皇が大和地方を御平定になり、橿原の宮に於て御即位になる際に賜はつた詔の中には、

恭しく寶位に臨み以て元々を鎮むべし。  
 とある。寶位とは天皇の御位のこと。元々とは國民全體のこと、元々を鎮むるといふのは國民全體を御統治になることである。而して此の『元々』といふ語を日本の語では『おほみたから』といふのである。此より後に至つても御歴代の天皇が祖宗の神靈を御祭祀になる時にいつも、『おほみたから』が幸福になるやうに神靈の御加護を御祈りになつたのである。『おほみたから』とは大なる寶といふことで、皇室に於ては、吾等一般國民を國の寶と思し召されて、之を『おほみたから』と御呼びになつたのである。吾等の中には地獄客の

い者も低い者もあり、富む者も貧しい者もあるが、皇室よりは盡く皆『おほみたから』と御呼びになるのである。國民各自の努力が集まつて此の國の發展の力が生まれるのであるから、國民は皆國の寶であると思し召されたのである。吾等は『おほみたから』と呼ばれたる此の光榮を空しくせぬやうに心得なければならぬのである。又孝徳天皇の御時には所謂大化の改新が行はれて、日本全國を統一的に治めらるゝ基礎が立つたのであるが、此の時の詔には國民全體を凡そ國家の有らゆる公民

と仰せられた。此の國家に屬する者其の地位身分の如何に拘らず、皆公民であると仰せられたのである。公民とは此の國に屬する所の大切なる民といふことである。即ち如何なる地位に在る者も、如何なる職業に従事する者も皆此の國に缺くべからざる者であるから、之を『公民』として認めなければならぬといふことを改めて仰せられたのである。

今日の吾等も互ひに『おほみたから』として認められ『公民』として認められた者であるといふ自覺を持たなければならぬのである。各自の職責を果し各自の業務に勵み、此の光榮を全うすることに力を盡すのが即ち各自の存在を意義あらしむるものであると考へなければならぬ。自己の利益のみを考へて國家に何等の貢獻を爲し得ぬものは『おほみたから』たる名を恥かしむるものである。私利私慾を主として公共の利益を忘れた者は『公民』の名を恥かしむる者であるといふことを知らなければならぬ。若し此の自覺に於て缺くる所があるならば、たとひ其の人の地位が高くても、その人の生活が裕かであつても、日本人たる資格を缺いて居る者といはなければならぬのである。東亞十億の人々を指導すべき地位に在る吾等は先づ以て互ひに此の自覺を養うて、各自の職責を果し、皇恩と國恩とに報ずるといふ決心をしなければならぬ。

# 視察表

ラヂオを聴いてあるうちに、いかにもまづい編輯だと思ふことがある。しかしこれをいつたら、ラヂオの専門家からは、きびしい談議を聞かされることであらう。そして僕等素人はこの談議を聴き、その複雑さになる程と思ひ、他愛もなく參つてしまふことであらう。刑務官も同様に専門家として世の人を參らせることはないだらうか。

必要以上の専門化がいまの諸方面の活動を救ひ難くしてゐるのではなからうか。必要以上に理窟をつけることは、やはり今の世に頭を叩かれねばならぬことであらう。われわれは良識が

總てに正しい道を與へることを知つてゐる。

道は説きつづけねばならない。自己に向つて、隣人に向つて、そして又收容者に向つて。自己も隣人もそして收容者も躓き、倒れ、嗟嘆するが、しかし道は説きつづけねばならない。百年のうちに自己が立ち直り、隣人や收容者に知己の出ることを願つて、やはり道は説きつづけられねばならない。

交通巡査が立つてゐると、僕等はこゝの頃の混雑した街路でも安心して通ることが出来る。僕等はさういふ意味で何時でも「叱る人」があることを願ふものである。近世の人の道徳的に缺陷の多いことは、かういふ「叱る人」が

なくなつたところにもその原因の一半はある。

近世といつても、大東亞戰爭の戦果は急テンポでこの「近世」を遠い過去に押し進めて行く。感激なしにこの現實をみつめることの出来るものは人ではない。

ある教師の言葉二つ

— 教師は出家である。世を捨てたものである。

— 子のない母親はない。教誨のない教師はない。

行刑の機能には、忘れられてゐる重要な面があるのではなからうか。或は

感しめであり、或は教化であるといふことは、誰でも口をついて出る言葉である。しかし、もつと重要な根本的なことは、それが一般國民にとつても收容者にとつても精神的に「難有い施設」であることを感銘させることである。これこそ日本行刑を特色づけるものであらう。

日本の刑罰がいつの時代にも異國の刑罰に比して緩和されたものであることは、法制史家も刑法學者も齊しくこれを認めてゐるのであるが、それは犯人をして處を得しむる「難有い施設」として刑罰を生かしめようとすることからいへたものであるとすることができよう。

(眞野阿菴)





# 獄中における陸奥宗光

清 澤 洌

先頃、小菅刑務所を見學した時、岡部所長の部屋に、古い手紙がかかつてゐるのが目についた。

なんですかと御聞きしたら、それは同氏の父君が、明治の初年に政治犯で獄に入り、そこから先輩に宛て獄改善の必要を論じたものだといふことだつた。その政治犯といふのは西南戦役の頃、例の陸奥宗光 林有造、大江卓等と共に薩長政府覆滅の陰謀に加つて、乾坤一擲の大業を試みんとしたのを、策露はれて檢舉された事件をいふのである。

『父が、そうした關係から監獄改良を思ひ立ち、その子が刑務官としてやつて居るので』と岡部所長は感慨深そうに笑はれた。

後の名外務大臣として聲名を千古の後に残した陸奥宗光の入獄事件は、極めて興味ある挿話であつて、少し極端な云ひ方をすれば牢獄が名外交を生んだともいひ得るのである。もつとも陸奥は、この事件については自から他に語つたことがなく、その真相も、少なくとも陸奥に關する限りは資料が少ないが、し

かし、かれが牢居四年四ヶ月の結果、その心事に一轉機を劃したことは事實だ。

何故に陸奥はこの事件については語ることを欲しなかつたか。元來陸奥宗光は非常な名作家であり、また讀書と、歴史と、文化に深い理解があつた。故にかれは極めて多忙、かつ病身なるに拘らず、自己の行動と經驗を隠すところなく書いて、後世に残してゐる。かれの書いた蹇蹇録の如きは日清戦争に關する殆んど唯一無二の貴重なる外交上の記録であつて、我等の如き外交史研究者にとつて、どれだけ裨益して居るか計り知れないものがある。

その陸奥はこの入獄事件に關しては、自己の傳記を書いた『小傳』に『この一事は余が半生の一大厄難にして自家の歴史上磨滅すべからざるの汚點なり、余は多言するを欲せず』とのみ書いて詳説して居らぬ。

陸奥は奇策縦横、稀にみる智謀の人であつた。かれは自己の叡智を信じた。従つて自身が計畫したことが失敗して、不測の禍を受けるやうな場合には、人を恨まないで、自己の智慧と用意が到らなかつたことを耻づるのである。これが彼がこの事件になると口を緘した所以であらう。

誰も知るやうに明治維新を持ち來した功勞者は、最も多く薩摩と長州であつた。この二藩が謂はゞ政權を戦ひ取つた關係から、彼等はこれを獨占した。薩長にあらざれば、どんな英才でも地位を得ることが出來ない事情にあつた。

陸奥宗光は和歌山藩の出身であるから、實力において衆をぬくものがあるに拘らず、その位置において伊藤博文、井上馨などの僚輩に比して遙かに低かつた。かれとしてはこれが不満である。そうした事が原因してゐたのであらう。かれは一つの位置に長く止ることをしなかつた。

西郷隆盛が鹿兒島で兵を擧げた時に、かれは元老院幹事の重職にゐた。西郷といふ大勢力家が變を起したのであるから、廟議は區々として定まらぬ。大久保利迪の如きは自から鹿兒島に出張して、親しく西郷を説き、西郷が若し聞かなければ刺し違へて死せんとまで云つた。伊藤博文の如きは、いま大久保を死なしては大變だと、極力これを止めた。『果して止めたことが、よかつたか悪かつたかを今でも迷つてゐる』と伊藤は後に牧野伸顯伯に語つたさうだ。この時、堂々と薩摩征伐を主張したのは、木戸であり、陸奥はその位置からいつて廟議を動かす力はないが、木戸と同説であつた。

陸奥がこれを主張したのは、大義名分の故もあるが、また敵本主義もあつた。かれは薩派の所謂有司專制は極端であつて、これがため新興日本の發達が阻礙されると考へた。この西南の亂を機會に、大久保の專制を打倒せんとしたのが、かれの一つの狙ひであつた。

この陸奥と同じやうな立場のものに土佐立志社の林有造や、大江卓などがあつて、陸奥の援助を乞ふた。林等の計畫は、熊本を薩兵と呼應し、土佐の兵を以て、大阪鎮臺を突いてこれを占領する。そして薩長政府を仆して、新政府を樹立し、國會を開設しようといふのである。陸奥が、どの程度にこの陰謀に深

## 二

入りしたかは、今なほ不明だが、その謀に加はつたことだけは事實である。この陰謀が露見して、大江その他が拘引されたのは明治十一年五月十五日のことである。西南の役は明治十年二月のことであるから、餘程、後であつたことが分らう。

## 三

陸奥が拘引されたのは明治十一年六月十日であつた。大久保利通が暗殺されたのは、五月十四日のことであるから、その約一ヶ月後の出來事である。

これについて小松緑の『外交秘話』によると大久保は流石に大量で、陸奥を陥れようとした河野敏鎌の進言に對しても、これに應じなかつた。然るに大久保が暗殺され、その後を繼いで伊藤博文が内務卿になるや、伊藤は河野の進言を入れて陸奥を檢舉したといつて居る。小松はこの史實をどこから得たか知らないが、かれは陸奥とも伊藤とも個人的な交際を有して、『伊藤博文傳』はかれの手になつたものである。小松は惜しいことに昨年死んだ。

陸奥に對する判決は、大審院判事玉乃世履によつて下されたが、左の如きものだ。

申 渡 書

和歌山縣紀伊國海上郡小松原通一丁目一番地久野宗瀨方同居 當時東京飯田町一丁目一番地由良應方寄留

和歌山縣士族 陸奥宗光

其方儀明治十年鹿兒島賊擧學ノ時ニ際シ、元老院幹事ノ職ヲ以テ、京都府行在所御用出張中、大江卓ガ林有造ト共ニ兵ヲ擧ゲ、政府ヲ顛覆セントスルノ企ヲ承知シ、又岩神昂ヨリ重臣暗殺ヲ謀ルコトヲ聞キ、同人等ガ擧學ノ勢儼ヲ假リテ、政體ヲ改革セント企テ、大江卓ト通謀シ、明治十年四月廿一日京都ヨリ暗號ノ電信ヲ以テ卓ニ約シ置タル密謀ノ報知ヲ促シ、其翌廿二日卓ガ

電報私報ノ禁令ヲ犯シ、元老院ノ暗號ヲ用ヒシ詐稱官員ノ電信ヲ以テ擧兵ノ密謀ヲ謀合スル報知ヲ得テ、卓ノ下阪ヲ待受タリ、右科ニ依リ除族ノ上、禁獄五年申付候事

大 審 院

かくて陸奥は除族されて平民となり、その上、五ヶ年の禁獄に處せられたのである。拘引が六月十日で、この判決が八月廿一日であるから、この大事件の決定が早かつたことを知るべきだ。

この裁判に挿話がある。最初、陸奥は徹頭徹尾知らぬ存せぬで通そうとしたが、その後大江の口供を讀聞かされ、これでは大江を苦しめるばかりだと考へて、大江の計畫に同意したのだと自供した。ところが判事の玉乃が、陸奥にしばしば八百屋お七の話をした。「お前は同意したのではなからうが」といふ謎である。この謎は陸奥には、よく分つてゐた。そういへば罪は軽くなるのである。しかし陸奥としては男として左様なことはいふぬ。後にかれは大江に語つた。

『我輩も苟くも男子だ。男子が他人の謀反を聞いたならばこれを止るか、同意するかの外はないではないか。自分は唯聞いたただけだといふ事にして置けば、玉乃が諷したやうに二年位は罪が軽くなつたかも知れん。まあ君等のために二年程餘計に罪を背負つた譯だよ』

四

刑が確定し山形に向けて東京を出發したのは九月一日のことである。同囚には鹿兒島の私學校黨に組した三浦介雄といふものがあつた。六人の獄吏がこの二人を護送した。陸奥は山形監獄に送られたが、途中まで秋田監獄に護送される同志岩神と一緒に、彼等は互に詩を應酬して旅愁を慰めた。上之山驛で岩神に別るゝ時、岩神に與へた詩は左の如くである。

迫るものがある。かれは決して人を恨まなかつた。そうした境遇に落ちたのは自身の不徳と不敏の致すところと考へた。それが後にも、この事については人にも語らず顧みて他を云つた所以であり、またそうした自責の氣持が、奮發して再び世に出で、農商務大臣、となつた理由である。

五

その頃、陸奥が山形の牢獄で焼死したといふニュースが東京に傳はつた。それが朝野を愕然たらしめた。

事實はかうだ。陸奥を收容してゐた山形監獄が放火のために焼け、焼死者が十九名に達したのである。明治十二年九月廿五日のことだ。山形監獄といへば陸奥のことが自然に想ひ出るのであるから、それがかれの焼死を傳へるに至つたのだ。ところが幸ひなことには、かれは同囚三浦と共に女監の裁縫場に移つてゐたので危難を免がれた。人間は運といふが、天はなほかれを必要としたのである。

伊藤博文は當時、内務卿であつたが、この新聞記事を見て非常に驚いた。早速山形縣に聞合せて、それが事實でないことを知つたが、伊藤は陸奥の如き有望な人物に、もしやの事があつたら國家の損失である。不取締な山形縣の監獄に、かれを託すべきでないといふので、宮城縣の監獄に移すことを主張し、これが實現をみた。伊藤は宮城縣令松平正直に親展書を送り、その取扱ひを特に注意させた。

陸奥が山形から宮城の監獄に移つたのは、明治十二年十一月卅日のことであつた。伊藤の注意があつたからであらう。大分優待され、途中は上等の旅館に宿つた。山形を發する時にも、仙臺に入る時にも詩があるが、こゝでは略す。

仙臺の監獄は山形のそれに比し、内部が餘程整つてゐた。讀書も自由、新聞

離別情兼秋夜深 燈前對座淚霑襟  
自今鳥海山頭月 應照愁人夜夜心

陸奥の獄中生活はそれほど苦痛なものではなかつた。一望が與へられ、書物と筆硯の差入れは自由であり、食物も差入された。新聞だけは禁ぜられたが實際は讀めたさうである。

陸奥は監獄のものには一切著をつけなくて、總べて取寄せた辨當を食つてゐた。辨當は一ヶ月十八圓で、山形袋町の旅宿後藤又兵衛に請負はしてゐた。後藤は古河市兵衛の配下のものであつたが、その古河はかれに恩顧を受けてゐた關係から、極めて親切にかれに酬むところがあつた。かれが獄の食物に手をつけなかつた一つの理由は、その時の山形の縣令の三島通庸は薩人であつてかれを好まないばかりでなく、かつて元老院幹事任職中、酒田の森藤右衛門訴訟事件取調のため、縣令に無通知で、岩神を差遣したことがあり、そうした事から感情の齟齬があつたからである。

陸奥は親孝行であつた。かれは獄中において詩作に耽つたが、想ひ一度、母の上に及ぶと字義なりに涕泣した。父は逝き、母は七十歳を越へてゐる。壯年（當時かれは三十五歳だつた）のかれが、年少より四方に變轉し、今は囚はれの身であつて、孝養をつくすに由がない。そうした氣持が、幾つもの詩となつてゐる。その一つに

不歎人世幾間關 懷母宵宵淚自潄  
回首家山千里外 夢魂髮髻拜慈顏

とある。その意は一身の蹉跎や間關は自分の嘆くところではないが、母を懷ふと涙潸然たるものがある。今や家山は千里の外にあり、夢は飛んで母君の慈顏を拜するといふのである。

陸奥が、その父君の三年忌にその不幸を詠びて詠じた詩の如きは、側々にも自由であつた。こゝでかれは朝夕勉強した。英國の碩學ベンザムの名著を翻譯したのも牢獄の中であつた。かれは明治十四年以後、毎日時間を定めて翻譯し、同房の三浦が淨寫に従事した。毎日大體四十枚を草し、稿をかへること十七回にも及んだといふ。

陸奥は若い時に英語を勉強したが、この機會を以て更に勉強した。かれは山形に居つた時にテイラーの萬國史を讀んで、英語と歴史とを併せて研究した。ベンザムの翻譯も、かれに經濟的知識を與へた。これ等の知識が結局、かれの名外交を生んだのである。

かれの努力は非常なもので、日中に來客がある時は、徹夜してもその日課だけは必ず終つた。後に駐米公使となり、また東京市會で疎腕を揮ひすぎて刺客の手に仆れた星亨が監獄に來訪して一週間も滞在したが、一緒にその原稿を校閲したりした。このベンザムの著は Principles of Morals and Legislation といふのであるから、元來ならば『道德及び立法の原理』とでもいふべきところであるが、かれは『利學正宗』と題して出獄の後、明治十六年に出版した。かれの『福堂獨語』も獄中の産物だ。

明治十五年十二月卅日、かれは特赦の恩命を受け、罪一等を減せられ、明治十六年一月四日に出獄した。かれはこれからどうするか。入獄中、懸命に勉強しながら、かれは將來の方針を熟慮した。かれは直ちに東京に歸らずに、仙臺南町の旅館井筒屋に滞在した。一度、かれの出獄を知り、面會に來る者が非常に多かつたが、かれは一切面會を謝絶して靜思した。

かれの實力を認めて、かれを招いたのは伊藤博文であつた。伊藤は憲法調査の大事を果して外國から歸つて來たのであつたが、かれに外遊を勧めた。かれはこの勧めに従つて米國から英國に赴き憲法問題を研究した。

陸奥は日本の出した最も偉大な外政家となつたが、これは獄中における修養が大きな原因をなして居る。



# 感想

小林秀雄

社會主義の運動が盛んだつた頃、僕等文學者の仲間でも警察や裁判所の御厄介になつた者の数は夥しいものだつたのだが、刑務所の御厄介になつた者は、實に意外に思はれる程少いのである。僕の知つてゐる人でも島木健作君と林房雄君ぐらゐのものだらう。これは、文壇であれほどの大騒ぎがあつたが、徹底的に考へ働いた人は實に少く、彌次馬ばかりいかに多かつたか語るものである。以來思想轉向の問題が喧しかつたが、これも問題の華々しさに誑かされないう方がいゝと思つてゐる。社會主義的彌次馬が日本主義的彌次馬に轉向した處で意味のないことである。思想問題といふものは人間の魂に關する問題なのであつて、風俗流行の問題ではないと考へる。轉向問題といふものも、彌次馬でなかつた少數の人間にほんとうに深刻に起つてゐる。

林房雄君が、二度目に刑務所から出て來て間もなくの事だつたと記憶してゐるが、彼はかういふ事を言つた。それは簡単な言葉だつたが僕は彼の氣持が實によく解り心を動かされたのでよく覚えてゐるのである。「刑に服して自分の心は深い痛手を負つたと思つたが、今はもうさうは思はぬ。自分の傷は淺かつたと思ふ。日本人が日本人から受けた傷は淺いのだよ、淺いのだといふ事がわかつたのだ」獨房で封筒貼りでもしてゐる時、突如として彼の頭にひらめいた美しい考へといふ風に僕には聞きとれた。勿論どういふ時に、かういふ考へ

が、彼の頭に浮んだか付度の限りではなし、どうでもいゝ事だが、今日でも彼の思想の中心には、この考へがあり、彼がいよいよ深くこの考へを信ずる様になつてゐる事は、確かな事に思へる。

どの様な反對理論を以つてしても、破れなかつた一つの理論が、或る體験の爲に破れる。林君の場合に起つたのもその事である。獄中生活といふ一つの痛切な體験が、外から得た思想を破、内から日本人の心を呼びよせましたのである。最も現實的であり、合理的でもあると信じた思想が挫折した以上、はや信ずるに足りる何物もないと思つた時、なほ僕等には日本人の心といふものが信じられるといふ事は、驚くべき事であり、感謝すべき事である。これを林君は、自分の受けた傷は淺いといふ言葉で言つたのである。日本人の心といふものは、僕等の心の一番深い處に在る、僕等の教養や智識や思想のづつと下の方に在る。

先日、天草四郎の大變面白い手紙を或る本で讀んだ。わが國に於けるキリシタンの運動は、最近の社會主義運動などに比べると、その規模の大ききから言つても、信仰の熱烈さから言つても同日の談ではなかつたのであるが、運動の原理として世界的なものを支持し、日本的な原理といふ様なものを全く信じなかつた點では共通した性質を持つてゐた。處が、さういふ普遍的な原理による思

想を熱烈に信じて、信する者が日本人であると共に處に自ら日本人が現れて來るのである。いざといふ場合に心の底で日本人が叫び出すのである。それを天草四郎の手紙に讀み、面白く思つた。島原の亂で、天草四郎が十餘萬の幕府の大軍に包圍され、原の孤壘を死守してゐた時、攻圍軍は、頑強な敵の防戦に堪り兼ね、唐船蘭船を雇つて天草灣から原の城を砲撃させたのである。これに對し四郎は激怒して、矢文を城中から攻圍軍に送つたが、その中に次の様な文句があるのである。自分は天下國家の望もなく、私心欲心もない、たゞ無量の天



# すゝめのは梅干一つか

常盤敏太

ものの書に、『すい』とは米をしらげたる義と見えたり。『すい』が事物本然の素質を抜き出し、研ぎすませば、『いき』と化し、『好き』にもなり、『數奇』をもこらし得べし。

○  
初夏の新緑を背景にして走つてゐる某郊外電車の客と成つたのは、つい先日のことであつた。

わたくしの座席の眞前に一人の年頃なる女性が掛けてゐる。體格の立派な目鼻立もとのつた娘である。どこから見ても非の打ちどころのない生れつきである。唯、洋装して、絹のストッキングを膝迄出して、アイシャドーが濃過ぎ、ドギツイ油氣が顔一面にただよつてゐるのは如何かと思はれる。アイシャ

主を信仰してゐるものである、「聊以非邪路」候、然者海上に唐船見來候、誠以小事之儀御座候處、漢土迄被相催候事越中之下々故に日本之外聞不可然候、自國他國之御沙汰不及是非一候、此等之趣御陣中可預御被覽一候」  
日本人の心は僕等の深い處にある。僕等が理解したり或は理解しなかつたり、或る時は信じたり或る時は疑つたりして居る思想やら智識やらのもつと下の深い處にある。

ドーに對比して、ルージュのまことに派手やかなのは、いかにも初夏らしくてよい畫題である。但し、それは『フランス敗れたり』の巴里はマロニエのプロムナードであつたなら、とは謂ふまでもない。

やがて、この娘が下車する。颯爽と小さいお尻を、殊更に大きく振りながら、ハイヒールを外側に歩き出す。さうして、廣くもないプラットホームと電車の間隙を品を作つて活潑に飛び越す形は、正に、アクロバチックの心得があるであらう。ハリウッドの娘子軍に仕立てても立派な凜乎たるものである。

瞬間、わたくしは日頃考へてゐた造化の妙を再び頭に浮べざるを得なかつた。これは宇宙の森羅萬象について言へることである。造化の妙は、それを感

心してばかり居すに、逆にして見るとよく解る。何のことはない、一寸、犬が猫であつたらと假定するのである。猫がワンワンと吠へて、犬がニャンニャンといふだけでも恰好がつかぬ。男が女であつたなら、男がザマス言葉でお腰をくによつかせ、女が低音で僕とか君などとやつたのでは調子がとれぬだらう。猫には猫らしい、女には女らしい調和が、その本性と習性の間に全體として得させられてゐることは、流石に造化の神の名工だと感心させられるのである。

ところで、人間はこの神の技に人工を加へたり、突然變異を搜したりして喜ぶ向もある。神の調和に狎れ過ぎたといふか、惡戯氣といふか、新物喰といふか、何れ、西施のやうな美人に一顧をつけて見度といふ我儘と類を同じくするものであらうが、顔中臍の鈴成りとなつては既に相手にされる程の美人でなくなるのである。イソップ物語を初め世界のお伽話集に必ず出て来る慾深でも、世の中の物全部が金に成つたらどうにもならぬ。造化の神の與へた金と世界に在るその他のものが調和して、初めてこの世であるのである。アメリカが戦前から世界の金の大部を抱へ込んで困つてゐるのなど可笑しくならぬ。全體の調和をとつて良くならず、獨りで勝手な我儘をしようなどは天罰觀面である。支那では法幣を死蔵してゐて、それが下落して仕舞つた笑話もあるとか。わが邦の同胞には紙幣を隠匿して公債も買はず貯蓄もしない者は一人もあ

るまい。神の調和の子だからである。突變とか變り種とかは動植物學者、金魚屋、杜鵑花屋、朝顔屋、見せ物興業主等は金儲けと喜び、心なき人々は珍らしがるであらうが、さしあたり、その鰹や金魚や朝顔や杜鵑花は片輪である譯である。わたくしが郊外電車で見えた娘さんに至つては、自ら求めて、氏神や親達の與へた見目貌を壊して化物に成らうとしてゐるのである。化粧も本然の美を助ける程度なら神の意志にも副ふだらうが、化物になつてはいけない。芝居でも怪談でも、人の神經を刺戟する程度の化物や變り種を好むものであるが、さればとて、その化物に自分で成らうなどとの了見を起しては物笑である。

らの史實に照しその女騎士道によるも、將又、シラーの詩ハンドシューへなどによつても窺へよう。

さもあらばあれ、東洋では女といふ言葉はくねくねと曲つた文字で表はされてゐる。太古の支那人も女性をしかく觀察したのであらう。この文字は日本に採り入れられて、千年が程の間に日本惟神の女性道と型實相融合し、今日の婦德觀を完成してゐるといふことが出来よう。

一方、古來、わが邦で世界の何れの國よりも最も敬愛せられてゐる梅は、又、女人木として日本畫家の畫題に愛好せられてゐる。梅の木は女といふ文字の集まりだといふのである。梅が女の子供を持つた母といふ尊い文字を擁してゐるのもこの故であらう。梅は、萬木の中でも、正に、最も、女の性質に近いのである。酷寒にじつと怵へて、雪にも風にもめげず、内に早くから春の準備にいそしんでゐるのである。ドイツ人の謂ふ強靱性なくしては出来ないことである。かくて、草木未だ起き出でぬ早春に花を持つて、皆の者を樂しませ喜ばしむる。しかも、その咲き出でた花は飽く迄つつましやかで、清淨で整つてゐる。枯淡な木に止る純白の花、僅かに擁する黄色の花葉、日本人ならば貴賤を問はず誰でも一鉢を一軸を一枝をと愛好するのである。年頭の若松が男ならば梅は正に清楚なる處女であらう。紅梅や梅の變種など日本人の趣味ではない。

さうして、梅は暗香馥郁といふ表現にその極致を觀る。人知れぬ暗中から馥郁たる芳香を送り出して、そこにつつましやかな梅花の存在を知るのである。幽玄といふべきか。妻の内助の功にも比すべく、眞に奥ゆかしさを見るのである。梅が日本人から愛される丈けでなくて尊敬される所以がここにある。

妖艶な牡丹が支那で賞せられ、華麗な薔薇が英國で愛され、女も花の如く、外觀的に牡丹、薔薇とならんと願望するのである。日本女性ならば、外觀麗麗

さて、わたくしは、車中で、これはいいものを見たと思ふ。高い入場料を拂つてモンパルナス邊の小屋に行つても、こんな眞實の芝居はないからである。演戲としても、郊外の新緑を背景にした野外劇の價値は十二分であつた。讀者諸氏は、この時勢にと、わたくしを責められるであらう。勿論、わたくしは、この時勢を抜きにしても、尙常に、わが日本を片時も忘れたことはない。さあれ、この珍奇な存在にぶつつかつた當時感じたやうに、これが日本娘の態かと澁面を作つた儘であつたならば『さがれ、をな女郎』位には成つて、この小文の起源とは成り得なかつたであらう。實は、わたくしは、いまも虫を殺してこれを書いてゐるのである。

確か、ハルバンの醫書に、女と男との性質上の對照が醫學的に、必然性をもつて、こまごまと書かれてゐたと思ふ。女性は内攻的であるとか、女性は強靱性に富むとかいふ言葉が、強く思ひ出される。誰でも成る程と背ける程度に感じてゐることであらう。その反對の性質が男であることはいふ迄もない。男女で人を成してゐるに拘らず、否、男女で人を作つてゐるから、男女は性質的に異らされてゐるのであらう。何故か？ 科學者も知らない。造化の神の妙に歸する他はない。しかし、科學的に觀察すれば、人間である以上、表面的に外放的で出姿張な西洋女についても、女の本然の性質は、東洋殊に日本女性のそれと相隔ること遠くないのを知る譯である。

唯、西洋人が好奇と本能にのみ生き、造化の調和に心を潜めず荒んだ神を恐れぬ生活をしたから、變態の女を作り上げて仕舞つたのである。ドイツ醫家の研究した女の本質と今日の米英女の生體とは全く反對の方向をとつてゐる。西洋の女がいかに突き上つてゐるかは、米英の現實を見る迄もなく、既に中世かな遊女やダンサーには成りたからぬものである。嘗つて、外遊中、一ドイツ人から、日本女性の奥ゆかしさ、殊に、日本では奥様といふのが理想の女性とせられてゐるさうだが、洵に女性に奥であり度いものだと聽かされたことである。これは『むらさき』にも譯載したこともあるリュウデッケといふドイツ女性であるが、ドイツ人なればこそと、こちらが感心したのである。アメリカ女、否、米英かぶれの日本女にはこんな觀察が出来る頭はない。日本女性の表現は奥様によく現はされてゐる。外放的な女に疎なのではない。

かくて、梅花は母ともなつて實を結ぶ。この實はガトウの如き徒らなる甘味を持たないのである。梅花の清淨、梅香の馥郁たるは兎もあれ、甘味の戀心は乙女の毎に憧憬するところであらう。しかし、それは永續せない運命である。凡そ、甘味は腐敗を招き、アルコールと化して狂ひ、ヒステリーの原因ともなる。梅花の清楚は處女の甘味を内心に湛へつつも健全に結實して、黴菌の還亂を俟たずに、おのづからなる酸味を用意するのである。日本女性に『すい』が最高の品位として嗜みとして愛せられ尊ばれるのと一脈相通する。大山將軍は生前『雪の進軍』を愛好せられ、戦役當時の部下に、よく唱はしめたと傳聞してゐるが、或はこれ『すい』といふのは梅干一つの名文句ではなかつたらうか。

今は、大東亞戦争下で銃前も銃後もない戰場である。幸に、多くの女性は本然の相に覺めたらしい。若し、かの郊外電車の化物女のやうなのが風をなすならば、遂に、『すい』といふのは梅干だけとならないものもあるまい。日本人は綜合的最高の美を『すい』といひ馴らはしてゐる。ギリシヤ人以降西洋人の如く『美』を最高完全のものとしなない日本人の氣高さが窺へて嬉し

い。世には顔容の美人は少ない。少ない美人を皆欲求すると経済的需給の原則が働いて、美人を突き上げることになる。素養のない近頃の配給小賣商人の威張るやうなものだ。鼻持がならぬ。さればとて、醜女が厚化粧すれば化物以外の何ものでもない。しかし、目鼻立の立派な女がやつても、狂気の沙汰か醜業婦としか見へない。女優や醜業婦なら觀覧者の好奇心をそそる程よいかも知れぬ。そんなものを求める數寄男もあるだらう。しかし、正常な女がそんな氣紛れ男を尊敬し、そんな好奇心の對象となりたがるかを胸に手をあてて考ふべきである。

だから、世の識者は心せねばならぬ。眞の日本女性は、珍奇を以つて自らを賣ることを潔とせないのである。聴くならぬ、婦人會など作つて、會長や幹事をやる外放的女達には、若い時代の甘酸ばい、腐敗した戀愛三昧を得々として吹聴し、離婚話や悶殺話を所謂文學的に語るのが多いと。それ以外の梅花の如き婦人は暗香馥郁とし、夫を内助し子女を養育して、外に出たがらないのである。

眞の日本人ならば、胸に手をあてて按ずれば分る。誰が、婦人參政權論者や婦人開放運動者、女職業藝術家等を尊敬するものがあらうか。これらは、珍奇の、突變の見せ物の外何ものでもない。婦人教育家すらがその子息を不良に放任するのは世の常である。女が出張張れば今日牛を賣り損ふばかりではない。軍神の母達は讚へらるべきである。しかし、そのどの母が賣らん哉を叫び、戀愛遊戯に憂身をやつしたであらうか。最も勇ましい、わが兵士達が母の懷をなつかしむ如く、男といふ者は何人を問はず、おのづと世の女性をみつからの母の如く尊敬するのである。だから母の感化は大きい。しかし、それは本然の母で、女で、なければならぬ。梅の如き健全な『すい』に徹した女性でなければならぬ。化物的化粧や服装や物腰の女ではない。淫蕩的、病的、廢物的な所謂『すい』な賣女ではない。

わたくし自身は、家計の切盛にも蓄財にも堅實の權化のやうな伴侶に愛想を

つかされ、二宮尊徳のやうに考慮を求めても見たが遂に去られて、殘された性と二人で苦しまなければならぬやうな愚太郎な男であつて、こんなことを響くのもまことに口幅つたい譯であるが、若し、わたくしの母や妹達が、世の有名な女性の如く、動き、化粧し、演説し、家と外にしてゐたら、わたくしはわたくしの母や姉に今日の萬分の一の尊敬をも拂ひ得なかつたであらう。否、この母姉を輕蔑しつつ離れ去つて、みづからも亦不良の組に投じたのではあるまいか。

古くは北條時政の母とか、山内一豊の妻とか、近くは水兵の母とか軍神の母達が、讚へられるのはそれらの婦人が男に對立して戰場を争ひ、又みづから讚へられんが爲の行動に努めたが故ではない。暗香馥郁たる梅花の如き徳を以て内助の功を全うした結果である。戦時といはず平時といはず男の補助として女の本来の性質を遺憾なく發揮したが爲である。戦時下、軍需品製造工場に、看護婦に、交通機關の車掌に、賣子娘に、女教員に、タイピストに、防護や勤勞奉仕に、更に、銃後の耕作に、慰問にその甲斐々々しき働姿が敬愛されるのであるが、やがては家庭に歸る日を前提としたものでなければ遂に女ではなくなるであらう。

女は三界に家なしともいはれてゐる。これは男に家が所屬してゐるからである。されば女が家庭に歸る限り、男の家は女の家以外のものではない。しかも、その家の奥に鎮座ましましつゝ馥郁と香るのである。造化の神の心に從つてゐれば三界の家は女の爲に作られてあるやうなものである。

わたくしは大東亞共榮圏の理念は八紘一字であり、わが民族の家族主義であり、その家族の奥に梅の如き香と『すい』を持ち續けねばならぬと思つてゐる。それは日本精神の半分を擔當する女性によつてである。かくて、すいといふのは梅干ばかりであつてはならぬ。

# 監獄改良の先覺者 留岡幸助翁 (下)

衰 田 長 平

## 翁と小河、有馬、原三翁との關係

私は刑政二月號小河博士の傳記を読んで、謹嚴な博士は一顰一笑もせぬ人で怒の色も見せず笑の聲を出さぬ人であつた。大低の人が聲を上げて笑ふよるな場合でも、上下の唇を嚙んで頬の邊を寄せて笑顔を見せるだけであつた。局僚の中小河さんの笑聲を聞いた人は一人もなかつたといふ記事を見て、微笑を禁じ得なかつた。夫れは私も曾ての講師であり、上司であつた博士の笑聲を聞いたことはなかつたのである。これに反して留岡翁は大に笑ふ人であつた。之に就て大阪時事新報は博士逝去の際その社説欄に「氏の笑顔を見ることの少なかつたのは、常に責任の重大を感じられたからであらう」と説明した揚句の引合ひに留岡翁を引

張り出し「我輩は今一人監獄改良家の留岡幸助氏を知つて居るが留岡氏は快活善く笑ふ人である。而して善笑の留岡氏と不笑の小河氏とは、常に相扶けて社會事業に其の力を注いで居た。小河氏の死は留岡氏に取つて恰も生身を殺がれた思ひであらう」と書いてある。

笑ふ、笑はざるの差別こそあれ、小河博士と翁とは密接な關係があつたのは事實である。翁が博士を知つたのは明治二十四年空知集治監で相見えたのが初めて、爾來三十五年の間同じ方面の仕事に協力して働いて來られた間柄である。翁が明治二十七年米國に遊學の爲め出發する、際、横濱早頭に見送つたのは、當時神奈川縣典獄であつた小河氏一人であつたと話されたことを記憶してゐる。

有馬四郎助氏と翁との關係に就いては、世間周知の事實である。私は曾て

有馬所長から、俺れと留岡君との關係は性的關係のない夫婦同様なもので切つても切れぬ間柄だと聞いたことがある。有馬所長が熱心な基督教信者として、人格を築き上げ、偉大な足跡を刑務界に残すに至つたのは、その性格の然らしむる處でもあり、他にも信者に導いた親友もあり、翁のみの感化とは云はぬが、翁の力預つて大なるものあるは斷言して憚らない。留岡君の死水は俺れが取ると、病氣見舞の歸途山室軍平氏に話された其の日に、却つて當人の有馬氏が先に斃れ、その翌日留岡翁が就眠されたのも奇しき因縁である。その共同葬を行はれた際に、私は朝鮮から

## 翁の少年時代の苦難

留岡翁が一身の榮達を度外視して、只管社會事業に一身を献げられたのは、キリストの感化に依る處であらうが、然し翁をしてこゝに至らしめたのは、その少年時代の試練に因由する處渺しとしない。私は曾て翁に揮毫を乞ふたことがある。翁は快諾して直に筆を執り左の文句を記して下された。

兄弟よ各々召されし時に在りし分に止りて神と偕に居るべし

「手を取りて神のみもとに歸りゆく二つのみたま送る今日かな」と弔電を送つて、昇天の靈に供へたのであつた。原胤昭翁も去二月九十歳の高齡を以

右哥林多前書第七章二十四節保羅の語を録す是れ余十七歳の時貧窮にして學ぶこと能はず徒らに煩悶せし時樹下祈禱して得たる聖語也

明治三十九年九月下浣 辱知 留岡 幸助

私は翁が十七歳の時の貧窮が、如何なる程度のものかを、好奇心から知りたいたと心掛けてみたが、實際を知るに至つて、翁に對する尊敬の念が一段と加はつたのである。翁の十七歳は正に受難時代であつた。夫れは貧窮といふだけの生ま優しいものでなく、常人では到底堪えられまいと思ふほどの迫害が、翁の一身に襲ひかゝつたのである。翁は元治元年三月岡山縣高梁町に生れ、父を吉田萬吉と云つたが襁褓にして同町の留岡金助といふ俠客肌の人に養はれて成長、十六歳の折、米入ヶりに基督教理の一斑を聞き感動する處あり、十七歳に高梁教會に於て上代牧師より洗禮を受けたが、之を聞いた養父は非常に立腹して叱る、諭す、折檻する、それでも止めぬのみか却て基督教のために氣焔を吐くといふ状態であつたので、養父の怒りは一層烈しくなり、縛つて天井に吊し上げ、藤蓆の

鞭を以つて手足や背を滅多打ちに打叩き、屢々氣絶せしめるに至つた。當時所轄の署長が元僧侶で大の耶蘇嫌ひであつたので其の頼みもあり、意地にも迫害の手を緩めることが出来ず、その迫害は三、四十日も續いたので森本牧師(松村介石翁)は日本基督教の殉教者となつて死ねとまで因果を含められたとのことである。然るに或夜養父の隙を見て森本牧師の許に逃出し二、三日匿つて貰つたが發見さるゝ心配もあつたので、岡山の金森牧師(通倫翁)の方に逃るゝこととなり、衰弱の身を以て、十數里の道を夜通し歩いて行かれ、暫く同師の許に居られたが、岡山も又危険だといふので四國に渡り、今治教會の横井牧師の許に約二年も隠れて居られたことである。森本牧師の許に逃げて來られたとき、繩のかゝつた兩手は青ひ筋が這入つてひどく縛られた迹が歴々と見え、その背と足とを見ると幾條となく鞭たれた跡が全面紫色に變じて居る。「アーひどいことをしたものだ。たとひ僧くとも、眞の親なら、こんなこともあるまい」とは養子に行つた経験のある牧師の當時の述懐談である。翁の其の後京都同志社に入學さるゝまでの苦心は想像に餘

りあるものがある。斯ゝる迫害を受けても頑として其の素志を挫げず、神と偕に在りといふ信念を以つてあらゆる誘惑に打勝ち、遂には養父金助をして翁の信仰と愛の力とに依り、基督の救ひに與らせることに至つたのである。少年時代にかゝる境遇に置かれた人は、何處かに暗らい影があり、稍もすればねぢけた根性になり勝ちであるのに、翁にはそんな陰影は微塵もなかつた。資性快活極めて朗らかで、どんな困難な問題に打つかつても屈托したり、閉口垂れたりすることがなかつた。極めて意思の強固な、そうして一面極めて同情の深い人であつたが、これらは信仰以外に斯ゝる苦難に逢着して得た、貴い体験の然らしむるところであらう。

留岡翁が、知名の士や富豪者と交り深かつたことに就いて、世間兎角の評を爲すものがないでもないが、私に言はしむれば、これは全く翁の誠意と、徳望とが然らしめた所以だと信ずる。徳富蘇峰先生は「日本の忠僕留岡幸助君を悼む」といふ標題の下に、東京日々及び大阪毎日に左の通寄せられてゐる。石井十次君逝いて二十年、今復た留岡幸助君を喪ふ。留岡君の計畫は、君の近状を知るもの、必しも驚く所ではあるまい。實を云へば君は其の病氣發生以來、殆んど醫師を絶望せしめた。然も君を喪ふたる日本は、正に一個の忠僕を少くしたのだ。然り日本は、其の頼もしき忠僕を失ふた。

留岡君は全く自強、自立の人であつた。君をして日本に於ける社會事業家の泰斗たらしめたのは、全く君の力行不惑の功であつた。然も是れ君が篤信教を奉じ、博愛衆を濟ひ、献身自から吝ならざる五十年の成果のみ。君は一面聖僧の如き愛心と、他面俗人の如き常識と。更らに別に勇敢善闘、百難不屈の豪腹とを有し、一切の誘惑に打勝ち、遂に奉教五十年の自祝會を開らきて、其晩節を全

日本の忠僕としての生涯

留岡翁が、知名の士や富豪者と交り深かつたことに就いて、世間兎角の評

くすることが出来た。君の事業は決して家庭學校に止らない。凡そ日本に於ける社會事業取り分け感化事業が、君の提唱、鼓吹、作興、振起に俟つ所多大であつたことは、我等の今更ら敷張を要せざる所だ。必らずしも君一人とは云はぬ。然も君ありて基督教は社會化せられた。君在りて日本化せられたと附け加へたい。

君は中心からの愛國者であり、中心からの皇室中心主義者であつた。而して君自身が自立自強の人たると同時に、交友を護るに於ては天才に庶かつた。何人も一たび君と知れば、終生の親友たらずして止む能はざるものがあつた。此れは君の志が誠腹奉仕に存じたるが爲めであらう。何人も此に到つて、君に同情せざるを得ざるものがあつた。

君の交友中、管鮑密だならざる有馬四郎助君は、殆んど君と前後して逝いた。前日まで君の死水を取るを期したる有馬君は、意外にも君に一步先んじて逝いた。諺に死生相ひ同く

すと云ふが、君等兩人が相伴ふて不歸の旅程に上りたるは我等に取り一種不可思議の前因あるが如き感に打たれしむ。

君は學者でもなく、又大なる手腕家でもなく、言論、文章、亦た卓絶と云ふではなかつた。然も明治、大正、昭和の間に於て、確かに一個の無私、誠懇にして、勤勉努力なる、我が日本の忠僕であつた。我等は終りまで君を愛し、而して終りまで君を惜しむ。

(東京日々所載の「日日だより」より轉載)

以上の記事を見ても、翁が如何に社會知名の士に信頼されてゐたかゞ分るのである。翁は昭和九年二月歳七十一にして他界されたが、翁の歿後其の遺徳を偲ぶ「留岡會」なるものが組織せられ、東京と大阪と東西呼應して毎年一回開會されつゝある。重なる來會者は大久保利武侯、小倉正恒、徳富蘇峰、國澤信兵衛、林市藏、中川望、牧野虎次、田子一民、高島平三郎等知名の士を始め百名内外も集まり、故人の徳を中心として懷舊談が試みられ、極めて和やかな意義深い會合である。此

執筆者紹介

- ◆高須芳次郎 日本大學教授・文學博士
- ◆小林一郎 中央大學教授
- ◆清澤 洵 外交評論家
- ◆小林秀雄 文藝評論家
- ◆常盤敏太 東京商科大学教授
- ◆荻田長平 元刑務所長
- ◆林 秀 日本青年外交協會 主事・著述者
- ◆石山賢吉 ダイヤモンド社長
- ◆松本鳴弦樓 武道家
- ◆石 光 葆 作家
- ◆佐伯復堂 東洋古典學者
- ◆田中茂雄 看守長(浦和刑務支所)



# 東亞共榮圈の外交と國際法

林 秀

## 外交講話

大東亞戰爭勃發以來僅か半歳、十八世紀から三世紀の間非道を逞しうした米英蘭の諸勢力は東亞から一掃された。不義の富貴浮雲の如しとか、三代の榮華覺むればまた種花一朝の夢である。昭南港、瓜哇の夏草は永遠に夢の跡になつてしまつたのである。

ところで、戰爭の進展と共に「東亞共榮圈の建設」といふ大役が日本國民の肩にかゝつて來た。この二三ヶ月あつた。足元から鳥の飛立つやうな騒ぎをしてゐるのは、いかにも豫想外の戰果を裏書きしてゐるやうで面白い。たゞその中で不思議に思ふのは、共榮圈の外交について論じたものを見ないことである。外交は當然國際法と關連する。共榮圈内の國家間の法律がどうなるか——これは實に重大な問題でなけ

ればならない。

共榮圈の外交及國際法を論じる前に、一體共榮圈に外交があるかどうか、またその必要ありや否やといふことが問題になる。然しこのことは、外交といふ概念の規定づけによつてはいかやうにも解釋が出来る。外交といふ言葉は、支那に於ては所謂「疆外之交」といふ極く單純な意味から出發してゐる。支那の「疆外之交」は、當方は好まないけれども夷狄が向ふから朝貢するので「仕方なく」交際する。といふ非常に尊大振つた言葉である。日本の外交といふ文字は明治初年に使はれ出したので、それまでは外國應接掛りなどと言つてゐた。竟り今日の「外

務省儀典課」の仕事の内容であつたらう。然るに維新後國力の伸展と共に日本も世界の檣舞臺に臨むに至つて。「外交」は所謂歐米流のディプロマシーと同一の概念をもつて使はれるやうになつて來てゐる。而も悪いことには、ディプロマシーの形式だけを模倣して來た結果、外交とは鼻眼鏡をかけてウ・スキーを飲むことのやうに世人は考へるやうになつた。外交官自身の中にも昔はさう考へてゐる人が少なくなつたのである。

勿論、かやうな意味の外交は共榮圈には必要がない。圈内ばかりではなく、圏外にだつて必要がないであらう。然し、外交とは世界政策を立案し、且つその實現のために對外的に折衝する手段であるとするならば、圏外はいふまでもなく圈内に於ても今後益

出して噴飯せざるものがあらう。彼は全く他所の隣組の常會へ行つて、ビールの配給について威たけ高に權利を主張したのである。我々の觀念は、このやうに、變つて來た。我々は今こそリットン報告書といふものを微笑をもつて思ひ出すが、その當時は實際それどころではなかつたのである。

日本が廣東を爆撃したのは、非武装都市爆撃であつて國際法違反だと騒ぎたてたのは、ほんの先日のことであつた。その本尊の米國はどうか。敗戦に血迷つた學句、日本の小學生に機關銃掃射を浴びせたではないか。日本の佛印平和進駐を罵倒したハル國務長官は、佛國の主權を無視してマルチニック島を不法占據したではないか。國際法には確かに幾多の矛盾と缺陷とがあつた。そしてそれを横暴なる強國のみが勝手に解釋し、勝手に適用したのである。これは明かに實質に於て「國際法」であるとは言へないであらう。尾佐竹博士によると、國際法(萬國公道)が日本に來た幕末當時には、箸の上げ下ろしにも「それは萬國公道によつて斯様爾々で御座る」など、鹿爪らしく相手をやつつけることが流行した

々その必要を増しこそすれ、減じるやうなことはあるまい。特に、今後A共榮圈の或る國がB共榮圈の或る國と交渉の生じた場合、A共榮圈の或る國がその共榮圈との間に於ける關係は極めて微妙であり、複雑である。そこには當然同一圈内の國と國との或る諒解が必要とされるであらう。そして之等の問題を世界政策的な立場から處理し、且つ折衝する爲には必然にその國と國との世界政策的な諒解がなければならぬ。こゝに、圏外に對する外交と共に圈内に於ける外交がある。そして此の二つは共に同一圏の繁榮と福祉とに貢獻すべきことはいふまでもないが、夫々にまた圏外に對する場合と圈内に於けるとでは相違して來なければならぬ。

斯くて、外交の觀念それ自體に大きな變化が來ると共に、その觀念も亦圏外と圈内とは自ら異なつた内容をもつて來るであらう。謂はゞ、全く他人のつきあひと切つても切れない親戚づきあひと二つあつて、そのつきあひなるものがまた舊體の廢止した新體制であるべきと同様である。これ

さうであるが、國際法の國際間に於ける効用も實際はこの範圍を遠く出るものではなかつた。

今や、東亞共榮圈建設の槌の音高く、塵けられた十億の人類の上に陽光燦として輝き出でんとしてゐる。十八世紀以來、我々東亞人を憫ましつゝけた舊國際法にも終焉は近づきつゝある。外交行爲と同様、新しき國際法も亦圏外法と圈内法との區別をもつてあらうが、それらは均しく共榮圈の發展と福祉の爲に新しき理念をもつて構想されなければならない。本誌に於て「法」を説くは、文字通り釋迦に説法であるが、共榮圈建設の着々進捗しつある此の機會に於て、筆者はその方の専門家たる讀者諸賢に課せられた此の重大責務の御自覺を煩はしたい。新しい國際法には新しい外交理念が必要である。新しい外交が共榮圈の發展を基調としたものであると同様、新しい國際法も亦かゝる性格の上に構想されるべきは論を俟たない。共榮圈の外交と國際法に更に多くの論說意見が交さ

を空襲下の隣組に例をとれば、爆弾がよその隣組に落ちたからと言つて我々は安閑として居られない。直ぐさまその救援に馳けつづけるべきであるが、併も自分勝手にバラバラにかけつづけてゐると、今度は自分の隣組に何か事件があつた場合何んの役にもたゝない。即ち、我々は自分の隣組を終始念頭におき乍ら他の隣組にも出来るだけの應援をしなければならぬのである。それには、隣組は普段から意思の疏通を圖つて置くことが必要であつて、機に臨み變に應じて一絲亂れぬ行動をとらなければならない。共榮圈の或る一國が、自分の共榮圈の利益を犠牲にして他の共榮圈の或る國と取引するが如きは斷じて許さるべきでない。

茲に、共榮圈の或る國家が、圈内に於て行動する場合と、圏外との諸關係を處理する場合の行動とを、豫め規定するものが必要となつて來る。國際法は一般に或る國と他の國との關係を規定する法規であるが、或る國と他の國との關係が前述の如く從來と異なつたものになれば、その法規も亦自ら變化

するものが當然であらう。共榮圈が實現した場合、最早或る國と他の國との關係は普遍的に或る國と他の國との關係ではない。尤も、從來とても國際法はこの意味で完全なものでなかつた。何故ならば、今までも厳密な意味では或る國と他の國との關係は普遍的であるとは言へない。國際法はかゝる特殊を無視し、無理矢理に「萬國」の「公法」たりしところに多くの缺陷を藏してゐる。而も、この抜け道を三百的に適用したのは米英である。例へば、日本の支那に於ける關係は、米國の支那に於ける關係とは現實に相違してゐる。恰も、米國の中南米に於ける關係が、日本の中南米に於けるそれと相違してゐると同断である。然るに、米國は中南米には強制的に特殊關係を押しつけ、支那に於ては日本と同様の關係を主張する。アメリカの「門戸開放」は、實にかういふ「君のものは僕のもの、僕のもののは僕のもの」の思想に出發するものであつた。

我々は、滿洲事變直後、リットン卿が滿洲を訪問視察した報告書に多大の關心を寄せたものであつた。然し今日、誰カリットン卿の滿洲訪問を思ひ



話講濟經

未だ生温い戦時色

もの、工夫と実行力の不足 — 石山賢吉

ドイツでは最近斯ういふ事が云はれてゐる。

『今は戦争だ、戦争に勝つ事が第一義だ。その外の事、戦争の後仕末を考へたりする事は止めやうじやないか。今は只一切を擧げて戦争に勝つ事だ！』といふのである。

實際ドイツの戦時経済政策を見ても實に徹底してゐる。

今までに、あらゆる戦時経済上の計畫はやりつくした。打つべき手は、悉く打ちつくしたといつても過言ではない。

産業面に於ける物の動員、人の動員すべてはやりつくした。もはや、此の上のやり方は、劣悪、不良の工場を思ひ切つて叩きツブす外はなくなつた。今までは曲りなりにも存続してゐた弱小工場を断然整理してしまふ。そしてその原料や機材や労働力を優良工場に廻す外はないのである。

そこで統一価格といふものを實行した。統一価格とは、個別価格に對する呼稱である。

今迄は、その工場々々の生産費に應じて軍需品の注文價格にも差等をつけてゐた。

たとへば、甲、乙、丙、と差等のある工場に注文を出す場合、丙が弱體工場で生産費が高くともそれに引き合ふ値段で注文してやつた。

然し最早そんな餘裕はなくなつた。それでは、人力、資材共に多くの無駄を生む。

そこで先の統一価格——優良工場の生産費に基いて注文價格の基準を一本建に決定したのである。

さうなると、弱小不良工場の生産費では引合ぬから、否應なしに自然淘汰を餘儀なくされる。

その工場には氣の毒だが止むを得ない。原料、努力は優良工場に吸収されるのである。

るのである。

それと同時に、軍需産業關係の事務一切を軍需省に統一してしまつた。各省との關係、交渉を一切廢止したのである。事務簡捷、能率化の徹底である。

元來、この種の事務が各省間に關聯交渉を持つのは、それ／＼の理窟があるからで、これが改廢は實に困難である。日本でも早くからその必要が叫ばれて前内閣當時、民間の要望を容れ、書記局長、法制局長官、企画院總裁、情報局長、法制局長官、企画院總裁、情報局長の四長官會議で採擇し種々實行の方策を講じたが、未だに適切な事務簡捷の効果があがつて居ない。それは、それだけの事情があるからだ。然しその事情を斷乎として打切る事にこそ非常時、戦時の政策があるのである。

冒頭の事は讀賣新聞特派員の情報であるが、これに較べると日本の戦時經濟政策など、まだ／＼生温いものである。戦時非常時政策とは行かないのである。

日本も、この戦争が長きに涉ればいづれは斯うなるのだから、やるなら一日も早くやつた方が國家の爲めであると思ふ。

日本でも此の際には、生産の重點主義を徹底的に強化して、軍需品の増産に全力を傾倒しなければならぬ。その爲めには市民生活も思ひ切つて改める必要がある。

現在の一般市民生活は、實は平時と大差ないのである。強ひてあると云へば、米とか野菜、魚、菓子、衣類などが多少窮屈になつた程度に過ぎない。すべての苦情は、平時の自由な生活を標準としたものだ。戦時非常時となれば、こんな事では濟まなされぬ筈である。

第一に物が不足だ。一片の物も無駄にしてはならぬ。家庭で捨てる塵芥は果して塵であるか、又は物資であるか。家庭の塵屑も仔細に見ればこれ悉く物資である。

紙屑は勿論、大根の尻ツボからガラスのかけらまで、これを丹念に選りわけて、それ／＼に處分すれば、悉く有用な物資なのだ。

れで好い。

住宅問題も大變だ。

借問一つないのに都會人は殖える一方だ。今度大都市の工場増設を禁じたから多少は緩和されるだらうが、一日と困つて行く。何とかしなければならぬ。遊休工場をアパートにするも一案だ。

丸の内のビルヂングはみんな夜になるとガラ明きだ。あの建物の何十分の一でも、獨身者の泊り込める設備にしたらどうか。不自由もあらうが、南方前線で蚊と毒蛇のジャングルに寝る將兵の事を思へば苦情のあるべき筈はない。

交通機關もその通り。

東京の市電は車臺數も、線路も行き詰りだ。古い車臺の修繕と車庫の増設でいくらか緩和出来る筈だ。バスは燃料不足で減らされる。これとて何とか工夫があるべきだ。乗客の方も、出、退勤時間のやりくりで何とか緩和出来るだらう。

いづれにしても工夫が足らぬ。手を拱いて、アレ／＼と眺めてゐるだけでは仕方がない。ドイツで云ふ通り、今は戦時だ。乗るか反るかの大難局だ。

覺悟を決める。あらゆる方面に工夫を凝らす。そしてドシ／＼實行する。それが戦時下日本國民最大の心得であらう。

然し、一緒クダに捨てられたのではこれを大量に集めて處分する場合、選りわけの手数と人件費で採算がとれない。

だから、見す／＼再生される物まで捨て／＼しまふ事になる。

各家庭で、捨てる時に選りわけて呉れるとその手間と費用が省ける。

一寸した、これだけの注意で廢品が尠太な物資に再生されるのだ。

紙屑に例をとつて見やう。

紙はどうして造るか。寒國に育つた百年、二百年の木を伐つて、薬品と機械力と多くの努力を使つてパルプにし、紙になつてからも、運賃、配給機關と多くの人手と金をかける。その紙に印刷したものを、讀んでしまふと紙屑にして捨てる。

なんたる事であらうか。印刷物は、インキのついたパルプである。新聞紙としても包紙や習字用に澤山の用途がある。

これを他の物とゴツチャに捨てるといふ法はない。簡単な機械にかけて還元すればパルプになる。それが又立派な紙に再生する。何故有用にしないか。

もちろん幾らかは屑屋の手から問屋に渡つて再生されるものもある。然し家庭の焚きつけにされるもの、

秘密書類と稱して倉庫に寝てゐる量も大したものだ。勿論ほんとうに秘密なものもあるが、中には唯、世間に晒したくないといふ理由だけで積み込んで置くものがある。學校の答案紙の如きその一例で、老大な量に上るらしい。これも皆再生品になる。この際、有効に處分したらどうか。

臺所の塵にしてもその通りだ。米の磨ぎ汁は肥料になる。野菜の屑、魚貝の切れツ端は家畜の飼料になる。ドイツでは街の辻々や、空地に豚を飼つてこれ等の殘廢品を與へてゐる。人手をかけて、運賃をかけて塵芥焼却場で灰にする。勿體ない話ではないか。

廢品を集めて置いても持つて行つてくれないといふ苦情がある。それは尤もだが、今少し、ほんとうに時局の重大性を認識して積極的な意氣込みを持てば、なんとか運搬の方法ぐらひは講じられる筈だ。

要は眞に非常時の氣持ちになる事である。服装では云へば——例の國民服といふものがある。

あれはどう見ても泰平の御代の産物だ。ポケットを横向きにつけてある。何の爲めか判らん。腰の背後にバンドがつけてある。バンドの使命は腰を締めるにあるだらう。それが締められもせず、唯飾りにしてつけてある。なんの價値もない。服屋に手数をかけさせ

布地を無駄にするだけだ。結局は物好きの考案にすぎない。

戦時生活とは『質實』以外の何もでもない。

精神的には剛健、生活的には質實はない。衣服なら丈夫なものや安く造る外は、弱いスフを體裁本位に仕立てるなどは全く適な行き方だ。泰平の考へである。

日本服も昔は股引、ハツビに特徴があつた。あれを巧く近代化することだ。それから仕立は家庭でやれるものでなければいかぬ。

どんな器用な奥さんでも、今の國民服を家庭で仕立てる人はあるまい。結局専門屋の努力にまかせる事になる。衣服などは本來、家庭の餘剩努力で出来るものでないといけぬのだ。

もつと／＼單純化して家庭で出来る國民服を造ることだ。

弱くて値が高い、では困る。先日もある生活改善の集會でこの話をしたら「十二圓の國民服もある」との答辯があつた。あるにはあつても着られないやうな代物だらう。

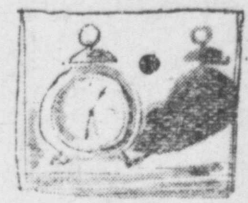
値段は六、七圓、仕立は單純、布地は丈夫——それが理想だ。ポケットが少なくて不便ならズツクの袋を提げて歩いて好い。

戦争時に見榮も外聞もあつたものではない。服のポケットをうんと減らし携帶品はズツク鞆に入れて歩く。そ



全國刑務所武道大會

觀戰記



劍道

大東亞戰下、赫々たる戦果に應へる職域奉公、本邦行刑の重責を擔ふ刑務官全員を網羅せる第十五回全國刑務所武道大會は、刑務協會主催のもとに、若葉かほる六月七日、豊多摩刑務所道場に開催された。

午前八時十分、會長代理の式辭について、高野佐三郎範士の指示、同八時三十分、いよ／＼演武の幕は切つて落とされた。

第一回——は、二區對三區戰。二區先鋒高橋二段、三區神山(二級)を小手に破り、つゞく菊地三段(二區)また、村川二段(三區)を「面」に居つたと見る間に、二區軍の機鋒いよ／＼鋭く、三區軍必死の奮戦もものは

板倉、村田、川村、逸見の四將いづれも對敵を打取つてこの回二區軍全勝、早くも優勢振りを發揮し、満場の注視を浴びた。

つゞいて第二回は——一區對四區。四區軍善戦すれど一區の陣客つひに揺がず、先鋒西原、副將岩崎の得點二の戦績を以て、一區四點の前に刀折れ、第三回——に入れば、第一回の敗者

三區軍は、新手的強敵第五區軍と對するに至り、こたびこそは、如何にもして前戦敗戦のあとを覆へさんものと、村川、塚原、懸命の奮闘、つひに對敵をしりぞけたが、他の四將みな敗れ、五區の得點四に對し三區軍の得點二、差二點のひらきを見せて退陣した。

かくて第四回——は第一回の勝者二區と、第二回の敗者四區の對戦となつたが、第一回に於ける二區軍の全勝を見た眼には、恐らくまた、四區軍も苦

戦をまぬかれまいと思はれた、イヤ、まさにその豫想の如く、二區の先鋒高橋二段、菊地三段は、對手西原、田内兩三段を屠り去り、餘勢を驅つて一氣に敵の堅壁を押しまくらんず勢ひに見えたが、四區の中堅中下、敢闘つひに二區板倉を「面」に討取るや、つゞく片岡、岩崎もまた對敵をしりぞけ、更に大將松本も二區の總帥逸見に肉迫、忽ちこれを軍門に降し、満堂の歡呼をあげた。即ちこの回、二區の得點二に對し四區軍四。

第五回——は一勝者同志の一區對五區戰。不運にも五區は、西村三段一點を得たるのみの戦績を以て一區に五點の得點をゆるすのやむなきに至り、第六回——に入る。すなはち戦は一區對四區、ともに、このあたりの奮戦によつて優勝圏内に繰込まんものと、熱戦敢闘、こゝを先途と斬り結ばば、四區の太刀先きやまさりけん、つひに四對二の戦績を以て、四區の勝ちとなり、戦氣刻々に熱し來たるうち

第七回——に移り、一勝一敗の戦績にある二區對五區の戦ひとはなつた。果然、五區軍は機鋒鋭く佐藤、福屋、健闘して二點を獲得したるも、後援これにつゞかず、残る四將ことごと

績を負ふて立ち、この一戦にも勝つて四戰四勝の個人優勝を錄せんとか、凜烈の氣合、縦横の馳騁、よく逸見(二區)の陣營を押しまくれば、逸見またよく應戦し、まこと大將同志の立合ひたるにふさはしかつたが、瞬利、油谷の飛襲一番、一劍ビュツ!と振り飛んで敵横面に凄音凜冽!げに水際立つた横面一本、思はず満堂に歡呼あがる。

即ち各軍の總得點を見れば——二區十七、一區十五、四區十二、五區十一、三區六の順位に於て、戦ひは終つた。

柔道

先づ主審三船範士の試合に關する指示あつて午後零時十分試合開始。

第一回戦は——二區對三區。二區先鋒倉本、三區先鋒大河内によつて戦端は開かれた。しかし、双方ともにキマリ業なく、わづかに倉本のとつた返し業認められて倉本の優勢勝ち、ついで小侯(二區)根布(三區)の對戦となつて根布の返し業あざやかに極つたが、つゞく三區軍一向に振はず、木平、小野、高木の三將相次いで敗れ、大將大

く敗れ、その戦績は、二區の四點に對し五區二點、かくて第八回——一區對三區戰となれば、三區軍この一戦に形勢を挽回せんと焦り立ち、力戦苦闘これつとめたるもつひに及ばず、一區の得點四點去に對し、三區わづかに二點にして潰えつた。

試みに、各軍これまでの總得點を顧みれば、一區十三點、二區十二點、三區六點(而かもすでに四戰、餘す戦なし)四區十點、五區七點となり、いきほひ、優勝争覇戦は、一區、二區、四區の三軍によつて戦はるゝ形勢にあつたが、

第九回——四區對五區戦に入るや、思はざりき、五區の強襲に面して四區軍の陣客遽かに崩れ、この回、四區わづかに二點、總計十二點にして戦ひ終つた。思ふに一區それまでの總得點は十三、二區は十二點にして、而かもこの兩軍は、なほあとに一戦を残してゐるのだから、少なくともその残りの戦に二點乃至三點を加へ得るものと見て大過ない。さすれば戦ひ終れる四區軍は最早完全に優勝圏の彼方に去つたわけである。

浦また、二區の大將傷つける小林の大外刈に敗れた。すなはちこの回、二區得の點五に對し三區辛うじて二。

第二回戦——一區對四區戦に入れば、四區先鋒石井、戦法頗る元氣なるも、緒戦のためか、得意の「體落し」、いまだ充分にのび切らず、時間延長三回に及んで勝敗決せず、つひに預りとなり、後刻あらためてこれが決戦を行はせることとなる。

ついで堀(二區)嵯峨(四區)の對戦となるや、嵯峨の業しきりに堀を襲ひ、「足車」、「大内刈」に堀を脅かしたる後、つひに斷然たる「うち勝」一本。つゞく一戦は福島(四區)に對する小兵青木(一區)、青木懸命に頑張れど、つひに福島のうち「うち勝」の強引にハネとばされば、かはる木村(一區)體さばきよく、四區の副將谷川を、しば／＼危地に陥れたが、谷川同志特に鋭く、峻烈の氣合ひ、つひに木村を壓倒して之を「大内刈」に仕とめ、早くもその試合上手の戦法を發揮し、次ぎの高橋(一區)對矢田(四區)は、双方ともに業のびず、わづかに高橋の攻勢を認めて優勢勝ち、大將戰、米代(一區)對川西(四區)は、米代足さばき極めて鮮やかに、ジリ／＼敵

かくて最後の決戦、第十回戦——は得點十三の一區に對する、十二點の二區軍によつて戦はるゝこととなり、満堂片唾をのんでこの一戦に見入つた。

見よ、二區の先鋒高橋は一軍の勝敗をこの一戦にかけて出場、一區先鋒青柳に挑戦、悍烈の氣魄早くも青柳を壓して攻め立つれば、青柳これを「面」

「胸」に防いだ、一瞬、高橋の得意「打ち小手」一本、「小手アリ」の審聲

疎として響く。こゝに二區はこの一點を加へて總點十三、即ち一區二區同點の形勢に變化して戦氣いやが上に高潮

し來たる時、兩軍の二陣菊地(二區)野田(一區)出場、忽ち場内いづばいの敢闘を展開したが、野田の劍勢やすぐれけん、ゾーンと踏込んで「し、面」

見事、かくて一區はいまの一區一點を加へて總點十四、勝越し一點となるや二區の第三陣板倉、猛然として熊澤に迫つたと見る間、瞬火電閃、小手を斬る!すなはちまた二區一點を迫付きて兩軍同點(十五點)一起一伏の戦績に試合の興趣いよ／＼深まり行く時、二區の村田は一區服部と接戦、たがひに善戦、攻防進退の妙をつくしたが、村

田や勝運に恵まれしか、三戰三勝の服部を見事「小手」に討取つて凱歌をあげ、二區の總點十六、こたびは逆に、二區一點の勝越しとなつて場内ドツと歡呼。

かくて副將同志、川村(二區)齋藤(一區)の戦ひとなつたが、この一戦こそまさに兩軍勝敗の岐點、川村(二區)勝てば二區の總點十七となるに反し、一區は依然十五點に釘付けされて結局こゝに二點の負越し、而かもあと

に、大將同志の一戦を残すのみなれば、よし、その大將戦に勝つても、一區はまだ一點を負越すこととなる。すなはち、この川村對齋藤の對戦にして川村の勝ちとなれば、最早大將戦は戦はな

くも、勝敗の數は川村の勝ちによつて既に決するのだ。川村勝つか、齋藤勝つか、この一戦の興味は實にこゝにある!さればにや一區の齋藤や、焦ち氣味、眞向平押しに攻め立つれば、川村巧みにこれに應じ、齋藤グツと踏込まんとした一瞬、倏忽飛襲流星の小手!

ブツリきまつて川村の勝ち、榮冠はつひに二區軍の手に歸した。

かくて優勝の勝運すでに一區軍を去つたとはいへ、大將同志の決戦はまた格別、一區の大將油谷、三戰三勝の戦

をすうち、一瞬川西の「大外刈」を  
 モロに切返して大快勝。この回、一區  
 二點、四區三點、預り一。

第三回戦は——五區對三區。五區は  
 段位低けれど闘志強烈、加ふるに各將  
 みな試合上手、先づ、その先鋒西尾、  
 優勢勝ちに氣をよくすれば、つよく二  
 陣、柴田一級、またよく戦つて惜敗せ  
 るも、そのあとをうけて梅田、田中、  
 西島の連勝となり、大將松川もまた勝  
 つかと思はれたが、惜しくも敵に優勢  
 勝ちを許し、五區四點、三區二點。

第四回戦——すなはち各軍第二回目  
 の戦ひに移れば、その最初は二區對四  
 區。倉本（二區）石井（四區）の先鋒  
 戦は、時間延長四度に及んで預りとな  
 ったが、つよく嵯峨（四區）對小侯  
 「大外、」一閃して小侯を屠り、千葉  
 「二區）對福島（四區）は延長預り後  
 の一戦に、福島の一足拂ひ「業アリと  
 なつて優勢勝ち、皆川（二區）對谷川  
 （四區）は、谷川氣を負ふて攻立つる  
 を、皆川また奮戦して互ひに業を出し  
 攻防延長二回の後、谷川の「釣込足」  
 つひにキマると見るや、二區の熱血漢  
 萩野谷、相つづ米方の敗戦に憤然とし

て出場、對手矢田をきめつけ、つ  
 ひに己が仕勝手の寝業に引込んで「締  
 め」を取り、二區大將小林は、右膝の  
 負傷を忍びつゝ、而かも四區大將川西  
 を制壓しつゝ、時間延長二回に及び、  
 最後にうった釣込腰に、優勢勝ちを獲  
 得して全軍の興望に應へた。すなはち  
 この回、二區二點、四區三點、預り  
 一。

第五回戦——は一區對五區。思ふに  
 この一戦たる、五區軍にとつて非常の  
 苦戦、大敵一區を向ふにまはしての戦  
 ひは、如何に五區軍の健闘を以てして  
 も至難なるべしと豫想されたが、果た  
 して、豫想あやまたず、五區は、わづ  
 かに、その三陣梅田が「釣込足」に對  
 手青木を倒したるに過ぎず、西尾、柴  
 田、田中、西島、松川の五將相ついで  
 敗れ、この回の得點一區五點、五區一  
 點。

第六回戦——となる。戦ひは四區對  
 三區だ。すなはち四區先鋒石井、また  
 「預り戦を繰返すかと思はれたる  
 に、俄然打つた腰業のイキ充分、敵體  
 モンドリ打つて疊にメリコむ。而かも  
 四區軍これに氣を得てか、嵯峨、福島  
 谷川、矢田（優勢勝ち）川西等ことこ  
 とく勝つて得點五。四區軍の意氣天を

てば、一區は十六點となつて四區と同  
 點になるのだが、不幸にして敗るれば  
 つひに優勝を四區にゆるさなければな  
 らない、米代の責任やまことに重大と  
 云はなければならぬ。

さるにても二區の大將小林は、昨日  
 の稽古に肝腎の右膝を痛めしため、著  
 るしくその戦力を減退し、緒戦以來き  
 まるべき業も容易にきまらず、得意の  
 右腰業また充分の戦果をあげ得なかつ  
 たにも拘はらず、ひるまず連戦、よく  
 三戦三勝の好成績ををさめたのだつた  
 が、今、一區の大將米代に立向つては  
 その傷つける右膝を以て果たしてよく  
 敵の釣込に抗し得るや否や。

「傷さへなければ小林の勝」まさに  
 これは満場の聲だつた。

されば米代の戦法また一段と慎重、  
 短軀を更に低く構へ、運步裁體、微塵  
 の隙なき攻防に、漸次、小林の疲勞を  
 待つうち、時間延長二回を重ねるに及  
 んで、小林の疲勞甚だしく、その體勢  
 や、崩れを見せる時、こゝぞとばかり  
 寝業に追ひ込み、つひに固め業に小林  
 を敗つた。

あゝ、かくて一區四區同點の戦績。  
 さらばその優劣は決戦によつてつけれ

こと四回、餘すところなき三區として  
 は、もはや頼勢挽回の餘地はない。宜  
 なり、その陣營一沫のさびしさを蔽ひ  
 得なかつた。

随つて、優勝争覇戦は一區對四區と  
 なる形勢にあるが、この十二點の二優  
 勝候補に對し、得點十點の二區、果た  
 して、どの程度に兩軍の戦績に迫り得  
 るか。満堂の興味はこゝにあつた。さ  
 ればこそ、

第九回戦（四區對五區）——は、兩軍  
 たがひに熱戦熱闘、さらぬだに氣を負  
 へる五區軍の闘魂いよく燃え、あは  
 よくば、この大敵四區軍に全勝して優  
 勝候補圏内にも割込まんず意氣組み、  
 氣勢鋭く突撃したが、中にも柴田一  
 級は、強敵嵯峨に對して氣いさゝかも  
 屈せず、そのわざに於て今試合中の白  
 眉たる嵯峨の腰業を、物の見事に切つ  
 て返し、ドツと満堂の歡呼を浴びた。  
 而かもつゞいて諸將の奮戦、いよく  
 場内に熱氣を漂はせたが、實力の差は  
 つひに如何ともする能はず、その後わ  
 づかに西島の一勝ありしのみにしてや

各區成績表

區	位	得點	區	位	得點
區一第	2	一四	區一第	1	一七
區二第	1	一七	區二第	3	一三
區三第	5	一六	區三第	5	一四
區四第	3	一三	區四第	2	一七
區五第	4	一一	區五第	4	一〇

區	位	得點	區	位	得點
區一第	1	一七	區一第	1	一七
區二第	3	一三	區二第	3	一三
區三第	5	一四	區三第	5	一四
區四第	2	一七	區四第	2	一七
區五第	4	一一	區五第	4	一一

（鳴弦樓記）



創作

# 明暗の境 (下)

石光葆

鳥内久は第三工場の床板のうへに、丸い英産ぶとんを敷き、あぐらをかいて、背を丸めて針をうごかすのが仕事である。同じやうな洋裁工が十数人、雑然とならび、疊針に似た太い針で柔道着や剣道具やズツクの製品を縫ひあげるのであつた。作業は朝の七時四十分から始められ、休憩、學課、食事のほかは夜の七時四十分までつづけられる。鳥内はものゝ一時間もすると、もう黙つて針をはこぶ辛氣くささに堪へられなくなるのであつた。何度もあぐらを組み直してみたり、便所へ立つたり、手を止めて人の縫ひぶりに見とれたり、はては絲卷を隣の男の膝許へ投げ出してちよつつかいかつたり、チュツと舌を鳴らして呼びかけ今日のおかづが何であるか取沙汰したりして、組長にしよつちう注意され、仕事の上でもへまばかりやつた。

親の膝下を飛び出して機械工場へ見習工に入つたが長續きせず、てきやの間を轉々とうつり歩く間に、すつかり飽つぽい癖がついてしまつたのである。元來が片親の盲愛に狎らされてわがまゝで放縱だつた。千住方面の絨毛會社の職工だつた父親は、母親のない不憫さに、弟妹とともに抱き温めるやうにしてつゝましく暮らしてゐたが、俄に景氣がよくになると家も子供も顧みなくなつた。取り殘された彼は半ばやけくそになり半ば面あてに、見習工募集の廣告をみて家をぬけ出したのだが、どこでもわがままが祟つた。竟に小遣に窮してブツクをやつたのを手始めに、トンビ、居あきと順々に性質のよくない悪事をかさねて、警察からまつすぐにこへ送られたのである。

鳥内は二ヶ月の身上調査期間を経て振りあてられた洋裁を、神妙にやらうとしたが、何より座業の苦しさには堪へられなかつた。自分では眞面目に縫ふつもりでも、いつか尻の方でもぞもぞしてきて、手の動きがひとりで停つてゐたり、ぼんやり横つちよを見てゐたり、それはどうにもならぬ生理的な現象のやうにさへ思はれた。或る日、彼は思ひつめたふうに擔當看守に願ひ出た。「先生、所長先生にお目にかかつて、一身上のことでお願ひしたいことがあるんです。」

た。家をとび出したのも、自分では氣づかないが、子等を顧みない父親への忿懣といふより、好景氣のさわめきをよそに、何時までも弟妹たちと一緒に子供扱ひされてゐることへの、思春期の反抗であつた。世間では少年工がちやほやされてゐた。

しかも現在の機構では如何ともなしがたい事實である。所長は自分の苦悶をえぐられたやうな氣がした。彼は夙に、作業設備の充實、實科教室の設置、職業訓練所の開設を主張し、せめて現在全國十ヶ所の少年刑務所で一様に數種類の同じ作業をしてゐるのを改めて、それぞれ違ふ作業を、専門的にやるのが出来たら授職の効果もあげられるだらうと考へて、機會あるごとに説いてゐた。

「はい、一身上の重大事ですから、直接所長先生にお話したいんです」

「まさかうまいこと云つて、づるけるんぢやあるまいな……あんまり人のことしやべんなよ。」

冗談にまぎらせつゝ、ちよつびり本音を匂はせて、鳥内を所長室へつれていつた。

いつぱし大人になつたつもの彼の彼は、未知の世界の魅力にひかれて自活しようとし、世間の渦にたちまち捲きこまれて我をわすれた。刑務所へ收容されてやつと平靜になつたのである。太い眉のあひだに刺々しさができ頬骨が突き出て、二年前の子供つぽさがなくなつたと同じやうに、ちよつびり覗いた大人の世界は、落ちついてみると、或る面では少しばかり大人じみた分別を與へるやうになつてゐた。

それが實現される日はいつのことだらう——ふつと眼の裏にしみた淡い感傷を振りすてるやうに、所長は腰かけた上體を乗り出し、まばたきもしないで堅く口をむすんでゐる鳥内の、枯れた喉佛を見上げた。「お前はまだ四級だつたな、四級の者は轉業は許されんことになつとる……」

「なにい！」

と看守は、頷をつき出して見すゑる眼になつた。刑務所の處置について不服や願望があれば、自由に申し出られることになつてはゐるが、いきなり「所長先生に」とくる者はほとんどなかつた。こいつ圖太い奴だ、さう云はぬばかりの鋭い凝視が、視つめられてもたじろがぬ鳥内の瞳から眞剣さを讀みわけた。「なんだい、急に。ここでは云へないことなのか。」

「先生、私を大人の刑務所へやつて頂けませんか。せうか。」

黙つたまゝ所長は、何故と眼で訊いた。「どうも私には裁縫はむきませんし、どうせ仕事を覚えるなら外へ出ても役にたつやうな仕事をしたいんです。こんどは本當に生れ變つてやるつもりですから、立派にそれで食つてゆけるやうな職を腕につけたいんです。この仕事はどれもなんだか頼りなくて……」

低い、つき放すやうな冷たさで云つて、「いや」と聲を柔らげた。「特にその必要を認めたら除外例はあるが、お前には必要は認められん。洋裁はむかんといふのはお前のわがまゝで、こちらではちやんと適性検査をやつた結果、それが一番いゝといふことになつたんだ。辛抱してやつてみる。お前はまた、仕事はどうの職を覚えるのなんて柄ぢやない、忍耐力を養ふことがお前には何よりも肝要なんだ。飽つぽく氣まぐれな根性をたゞき直して、どつしりした規則正しい人間にな

る、それがお前には一ばん大切なんだ。與へられた仕事に文句をつけるのが、そもそも間違つとる。他のことは何も考へずに、自分の任務にまつすぐ熱心に突き進んだら、仕事だつて自然と身についてくるんだ。

今からまだ二年も先の——さうだつたな——出てからのことなど心配せんでもいゝ。それに大人の刑務所は、お前はゆく資格もないが、作業は進歩してゐてもいろいろと爲めにならんことがある。だからかうして、お前たち同じ年頃の者ばかり集めてあるんぢやないか。お前たちはまだまだ將來があるんだから、これからのやり方ひとつで立派な國民にもなれる。こゝへきても前科がつかんといふのは、さうした將來のことを考慮しての親心なんだ。餘計なことは考へずに、面目に辛抱しろ、ええ、解つたか。」

さうも云ひ得る。よほど作業成績がよくなければ、そのまゝ世間で通用しかねる場合が多いのだ。刑務官の誰もが齒がゆがりながら、

語尾をいぢい抑へつける力のこもつた云ひ方だつた。鳥内はふかく頭を垂れ、喉佛をこくりと鳴らした。

その當座は作業ぶりが變つたが、三日とつづかなかつた。だから今度も、どうせ長續きしないだらうとたかをくゝつてゐた鳥内の態度は、一ヶ月すぎても作業ぶりだけでなく、點呼の返事の仕方から體操の手の振り方、教室における姿勢、すべてにひたむきな熱意を現はしつゞけて看守や教師の眼をみはらせた。工場でわきめもふらず針を運んでゐて、膝關

うにさへ思はれた。或る日、彼は思ひつめたふうに擔當看守に願ひ出た。「先生、所長先生にお目にかかつて、一身上のことでお願ひしたいことがあるんです。」

節が痛くなり腰の邊がもぞもぞしてくと、頤をくひしはるやうにひき、ズツクに突きさす針に必要以上の力をこめてぐつと押しやり、通つた針を大きく肘を伸してひつぱりつけるのであつた。手捌きも機敏だつた。ときどきウムと掛聲をかけた。もはや縫物をしてゐる姿とは思へなかつた。針と糸によつて性格と苦闘してゐる、そんな嚴肅さが感じられ、周りの者は氣押されるやうな壓迫に身をぢぢめた。

五

待望の雨が降つてからといふもの、廣い野面を吹いてくる風にも、一脈のやわらか味が感じられた。降ると又降り、晴雨きはまりないなかにも、季節のぬるみが少年たちの頬を明るくさせた。空を刺す樺の樹立も氣のせい、か、鋭い枝先に丸味がついたやうで、風にさわさわと鳴るあのいやな音もなくなつた。砂利採取に河原へ出かける少年たちは、富士山の姿によつてその日の運勢をうらなふ。碧い空にくつきりと白い線を浮出してゐた山は、模糊とした霧にぼやける日が多くなつた。

三月になり、もう春だと安堵する出鼻をくぢくやうに、雪が降つた。雪は途中から氷雨になつて、執拗に工場の屋根をたゞいた。第三工場では連夜、延長作業がつけられ

練しても、掌の傷痕はいつも絶えたことがなく、掌全體に膨れぼつたい感じがして、當革で針尻をおす觸覚がうづくやうな快さだつた。

夜業が終つていきなり立ちあがらうとする、膝が充分に伸びきらないでよろめくことがあつた。鳥内はまづ腰を浮かして片足づゝ横にのばし、膝を揉みほぐしてから靜かに立ちあがるのである。立つてみると、やはり疲れが骨のふしぶしに沁みてゐるやうだつた。

あとは舍房へかへつて寝るばかりである。少年たちは眠る愉しさをおもひながきつゝ、くたびれた顔色に似ぬ機敏さで工場の清掃にとりかゝる。同じやうな少年の隊長の指揮によつて、全てが自治的にはこぼれる。備品を片づける者、帚ではく者、塵取をもつてくる者、手ぎわよく分擔して工場内が一つになつて動くとき、さうした物の觸れあふ音しかないのに、生あるかのやうに弾みのある伸びのびしたざわめきになるのであつた。

洗面がすんで床板の上に整列した第三小隊は、皇居遙拜、「故郷に感謝の禮」「工場に感謝の禮」を型のごとくやつて、隊列を組んだまゝ、檢身場へ出ていつた。音がしなくなつたので歇んだのかと思つてゐた氷雨は、いつの間にか糠のやうな雨になつてゐて、檢身場へつゞく渡廊下は屋根があるのに混濁土がぬれてゐた。所内のところどころに残つてゐる

てゐた。終業喇叭が鳴りわたつてどの工場も暗くなつたなかに、ひとり洋裁工場だけは燭光のぶい電燈の光りが窓から洩れて、氷雨によごれた雪を照らしてゐた。緊急延長作業である。夜食でしばらく休憩した少年たちは、ふたたび職場についた。ミシンに向ふ者、裁斷臺のそばに立ちはだかる者、アイロンをかける者、縫ひかがる者、閉ぢこめられた場内は一齊に活氣づき、忙がしさうにミシンを踏む音がいらだたしく、時にはやけつぱちみために聞えた。「製品は海軍へ納める。お國のために働いてゐる水兵さんが、みんなの作るこの吊床で寝るんだから、みんなは結局お國のために盡すことになるんだ。戦地にゐる兵隊さんと同じやうに國家に御奉公できるんだ。そのつもりで大いに頑張つて、早く立派な製品を作つてくれ。これが間にあはないと水兵さんたちの寝る場所がなくなる。水兵さんをそんな目に會はせてはわれわれ銃後の國民の申しわけが、んんから、どうしても期日までに仕上げるやうに特に注意しておく。」

擔當看守が活潑な聲でさう云つたのは五日前だつた。お國のために、水兵さんのために、この言葉が彼等を感じさせ、あたかも銃をとつて戦争に参加するやうな意氣ごみで、連日連夜、仕事にはげんだ。普通の延長作業とは眼色からしてちがひ、黙りこくつて互に能率を競ひあひながら、憑かれたやうに若い

雪がぼうつと白く見え、底冷えのする風が、廊下の兩側に腰の高さまである板扉を越えて、雨滴を襟首へ吹きつけた。

檢身場へ近づくと小隊全員はさらに八人づつに分れて、隊長の號令一下、一組づつ裸になつて中へ飛びこむ。シツシツシツとかフツフツフツとか喰ひしばつた齒の間から息を吐きながら、作業衣を釘にひつかけてそこにぶら下つてゐる冷えきつた常衣に着かへ、向ふ側の舍房へつゞく廊下へ出るのだ。風は遠慮なく吹きこんだ。單調な號令は繰りかへし繰りかへされ、まだ先の連中がごそごそやつてるのに次の八人がとびこんでくるので、泡をくつて袖に手を通しながら出る者が少なくなつた。

鳥内は鈕をはづして次の番を待つた。寒さで體がふるふるのを小刻みな足ぶみでまぎらさうとすると、濡れた足袋がジュツジュツといやな音をたて、その度につんと凍るやうな冷さが足裏へひびいた。

「すすめえッ！」

わあッと喚くやうな號令だ。八人が同時に服をぬいで駆けこんだ。一秒を争ふ肩がぶつつかり合つた。釘へ作業衣をひつかけようとした鳥内は、

「痛あッ！」

と痛高い叫びをあげて、そこへ踏みこんだ。少年たちは立ちすくんだ。

肉體の精魂を傾けつくした。五日目にはさすがに疲勞を眼の隅にあらはしてゐる者、げつそり面やつれしてゐる者があつた。

鳥内久は、しかし、疲れを知らぬ戦車のやうであつた。別人のごとく態度が變つてから、彼の腕前はぐんぐん上達した。針に糸を通す手つきもあざやかなら、掌でぐつと針の尻をおす體のこなしも堂に入つてきた。普通の者が一枚縫ふあひだに半分も怪しかつたのに、今ではあべこべに一枚半は樂に縫ふやうになり、おまけに縫ひ目も正しく縮まつてゐた。いつも縫ひ高は一番か二番だつた。

彼は背を丸め兩肘を張るやうにして、ときどき頭へ手をやつては針に脂をつけて縫つた。厚いカンバスを太い麻糸で縫ふのだから、見かけによらぬ力が要る。右掌には細い革をつけてゐるが、力をこめて押す針の尻が、どうかすると革をすべつて掌に刺さることがあつた。

掌には發疹痕みたいな粒々が、幾つもできてゐた。古い痕が消えぬうちに新しいのができ、黴づんだのや紅いのや、色によつて新舊のけじめがあつた。氣が張つてゐるせい、か、突き立つたときにはそれほど痛いと感ぜないのに、あとでづきんづきん脳髓にまでひびいてくることがある。これが痛いやうで一人前になれる、と彼等は云はれた。鳥内はわざと邪険に右掌を扱つた。縫ふ腕前は熟

「どうした？」

擔當看守が二人駆けよつた。そのただならぬ様子を舍房の入口から眺めてゐた疋田部長が、慌てゝとんできた。

鳥内は誤つて右掌を釘でひつ裂いたのである。五分ほどの裂傷ができて、血が床へ滴りおちた。生憎と連日の猛作業で膨れあがつたやうになつてゐたところへ、よほど強くひつかけたか拍子が悪かつたものとみえて、血は拭いても拭いても出てくるのであつた。

「やつぱりお前だつたのか、どうも今の聲はお前らしいと思つた。」

大事を豫想してきた疋田は、ホツとした聲を出した。なにか軽い冗談を云つてやりたくなつたが、ふと眞顔になつて、

「痛むだらう、すゐぶん膨れてゐからな。」

さう云つて傍の看守をふりかへつた。

「御苦勞だが、醫務室へつれてつてくれんかね。」

ぬかるみの中庭を、鳥内は看守に連れられて、よろめくやうに足袋をびちやつかせていつた。

奴さんも今度の刑務官會議で三級に進むだらう。さう思ひながら疋田はひよろ高いその後姿をいつまでも見送つていた。

「すすめえッ！」

耳のそばで一そう緊張した小隊長の號令が再び夜空に喚き出した。(をわり)



刑政俳壇

題 當季隨意
用紙 官私製葉書
締切 毎月五日限

筆洗ふ水輪にゆる、雲の峰
から梅雨や又さし替ゆる移植篋
種子蒔いてまじないにさす鳥の羽根
谿渡るケ、イブルカー、や時鳥
燕や出島岸壁監船や時鳥
眞白なる病院の峠や時鳥
駕で越す仁田の峠や時鳥
緋に燃ゆる躑躅しづかに小糠雨
ひかりつゝ、泰山木の花雫
鯉轍はためく影や朝の窓雫
奥深き木立の中に百合涼し
しづけさに地蟲なくなり葛の花
蝸牛這へく、夕日落つるまで
白百合のみな横向いて開きけり
平かな岩に踏み、河鹿きく
誘蛾燈をともし合圖の太鼓かな
蕨狩歸途を淺間の温泉に浸る
藤棚に栗鼠の尾を振る影とぼる
荒海のしぶきかすめて燕とぶ
桐の花こぼる、門に蜆買ふ
大景や十勝連峰雪残る
雲雀鳴くや築堤工事歩れり

北山の杉の木出しや麥の道
蘆そよぎ初夏の湖かげりけり
蚤はふや表紙のとれし物の本
睡蓮や静かに雲の影移る
父逝きて早一年の葵咲く
梅雨晴の湖水に映る家の影
笑ふ娘の瞳の碧し五月晴
タイプ打つ窓に優しき夏の花
卯の花や湧き上り来る溪の雲
雪解の峽にあがる木遣唄
兵の家村長の來て水見舞
夕映ゆる麓に白き辛夷かな
獄庭やばらの花園美し軒家
螢火や昔渡舟の一軒家
ゆるやかに淀み流れつ鮎の淵
雨あと土やはらかく畑を打つ
山裾をとり巻く雲や梅雨近し
教會のばらの生垣美しく
緑林に虹たなびけり瀧しぶき
雁歸る夕暮時や星一つ
更衣朝月残る早出番
事務室の窓明け放ち初夏の風
麥笛を吹きならしつゝ、足拍子
遠ざかる蹄の音や夏の暮
畦路や袂の下を飛ぶ螢
糞干して垣の朝顔しほみけり
お土産に提げて歸るや葎籠
花莫産に明るくなりし座敷かな
水打つて濡れし句碑あり御門入
温泉煙の吹きあげゆる、若葉かな
新緑の一筋の道砲車行く

滋賀 西村幸吉
横濱 先崎寧芳
宇都宮 高島實
名古屋 大岩尙子
新義州 玉利一十四
名古屋 西川千秋
京都 矢野光子
小田原 本田花香
群山 深見森都
札幌 許斐美雄
堺 賀屋春濤
府中 齋地仙北
小田原 内田露寶
福岡 藤内勝雄
名古屋 三田麥村
高松 鐵格
金泉 大淵柳城
名古屋 澤田梅園
前橋 小林彦永
千葉 小川太一
高松 三原いしる
前橋 手島彌平
高知 近森美智子
小田原 土居如舟
大津 鈴木照香
廣島 伊豆孤山
堺 賀屋壽濤
松本 長田雀人
弘前 奈良一葉

添削實例 花 蓑

春の水空見上ぐれば暮れてあし 行子
原句「春の水眼あぐれば、四方暮れてあし」
空が暮れて水明りが残つてゐる景色を思ひ浮べて加筆したり、眼をあげて空の四方を見廻したのであらうが原句にては景色現れず。
太刀を拭く懐紙に梅の枝の影 省 吾
原句「太刀を拭く懐紙に梅の影遊ぶ」
影遊ぶは印象明瞭ならず技巧を弄して却て實景現はれず、「枝の影」の單純なるに若かず。
征く夫に入學の子にぬかりなく 和 子
原句「征く夫に入學の子にぬかりなく、家せわし」
夫は出征する、子供は入學をするといふやうなことは今日の家庭にはありがちなことである。その中であつて主婦の心構としてぬかりなく事に當らねばならぬことは言ふまでもない、この作者の心持もそこにあるのであらうが家せわしではその心持が出ない。
辭するとき體の障子更けてあり 柚餅子
原句「辭意かた、體の障子更けてなを」
辭意固くは辭職の意思が固いといふ如き場合に用ゐらるゝ語なり、こゝは辭去する意味と解して加筆したり、斯様な用語は最も注意しなければならぬ。
石段をのぼれば花の上 巖
原句「石段をのぼりて見上ぐ櫻月」
櫻月は言葉窮せり、表現は素直なるをよしとす、舌溜りを感じるが如き場合は何度も「字句を推敲すべし」。
いつぞやの通路と泊り合せけり 雅 城
原句「いつぞやの通路と宿を隣りけり」
「宿を隣りけり」にては隣の宿の如く解せらるゝ、泊り合はせし意味のつもりならん。泡もぐる蛸料のしきりに尾をかふる 美奈子

原句「泡にもぐりけり、蛸料のしきりに尾をかふる」
こゝは泡もぐると現在動詞にせねばならぬ、のみならず原句の如く字餘りにするは拙なり。
蝶のみち田螺のみちをよこぎりぬ 青 盾
原句「蝶のみち田螺の舗道貫きぬ」
田螺のみちを舗道と形容する如き誇張にして厭味なり、言葉のしやれは禁物なり。
槐老い春の芽ぐみも遅々として 江 南
原句「槐老い、遅るゝ芽ぐみ支那のやう」
槐の老木が芽ぐみの遅きを細敘すれば足る、「支那のやう」は月並に墜するもの。
岬より島へとかけて春の虹 島 霞
原句「初、虹や岬と島のすぢかひに」
原句の如くむつかしく言ひて却て景色現はれず。
薫風やそゞろ讚美歌口ずさむ 隅 水
原句「薫風にふと讚美歌を口ずさむ」
早柄の帆襖見えて雛の窓 哲 子
原句「早柄の帆襖見えて雛の窓」
山畑や括られしまゝ桑芽ぶく ゆきを
原句「括られしまゝに芽吹きて山の桑」
菰の芽や遠賀の濁の水不染 さゝむ
原句「菰の芽や遠賀の濁の水不染」
葬りの土も涙も凍てにけり 三
原句「葬る可き土も涙も凍てにけり」
枌の芽に阿蘇の火かけのほの動く 青 盾
原句「枌の芽に阿蘇の火かけの動く夜々」
苦力来るふところに子を妻は抱き 北 史
原句「苦力来るぬ婦はふところに子を抱き」

松金馬府金府長

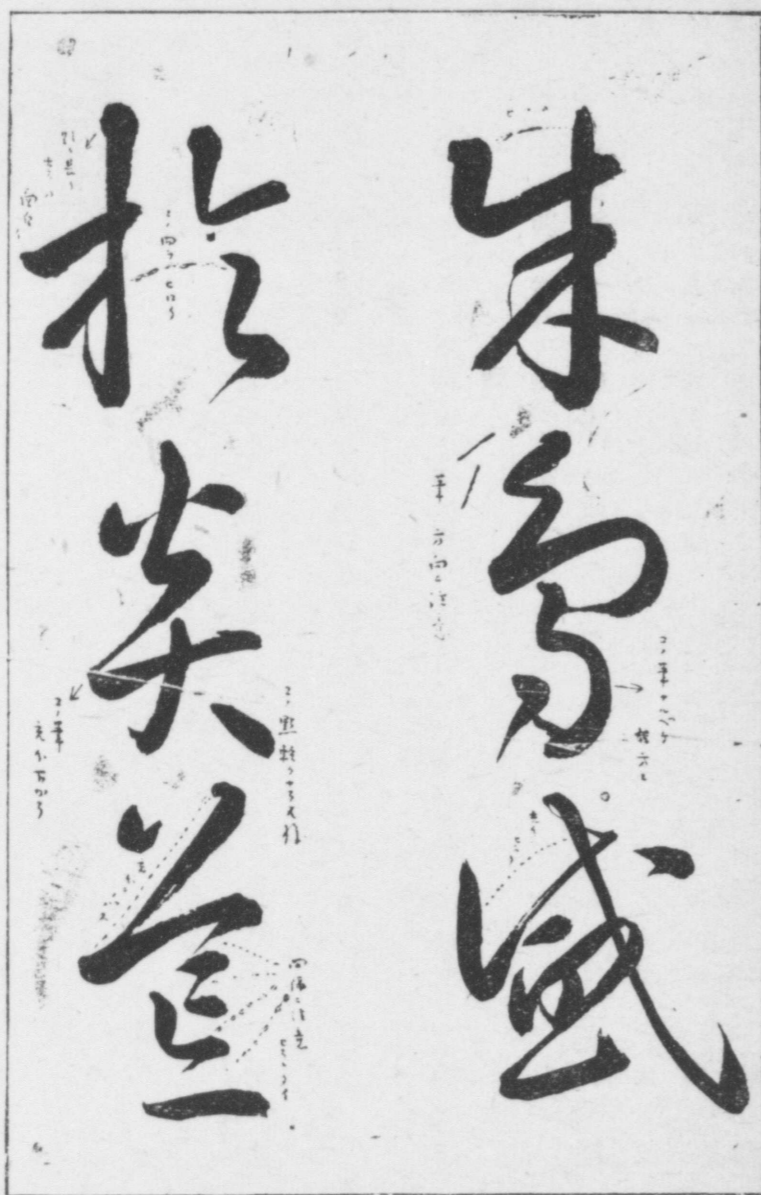
江刑山中刑中控

金花村足花小龍  
織上助林田  
下玉二秋祐杏  
仙軒鴻鶴軒水村

鳥香水帶松豐  
取刑刑廣江刑  
五級

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
坂壹岡柳渡次  
田野部部  
光勝西提純  
壽三山石克郎

▲翠精君、筆はのびて居る配字が少し悪い。▲次郎君、充分に暢びる素質がある。▲竹巖君、蘭亭を吟して筆致極めて妙。▲秋翠君、本文に比して落款が少し劣る。▲曉山君、楷法を良くこれまで極めて敬服。▲雲洋君、少



松名東府  
三二一刑  
江刑京刑  
級級級  
○小竹遊日  
川内谷高  
舟雲曉翠  
水洋山泉

水花岡銅名  
刑刑刑路刑  
級級級級

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
小林見知雄  
以下略

旭長 條 龍 杏  
課 刑 崎 田 村  
朱鳥感於炎荒  
審 查 概 評

し弱い強くなる様も一工夫あれ。▲舟水君、少し重いが真剣な點に於て他にまさる。▲杏村君、重厚。▲肇君、郷道昭の筆とは趣きは多少違ふが堂々として居てよい。▲清芳君、上品でよい。▲次郎君、綺麗に出来て居る。▲純克君、揮毫する態度が真剣である。

條 幅

▲華堂君、堂々たり。▲竹巖君、筆の爲めか少ひ潤に乏しい。▲曉山君、少し細い。▲常春君、温雅。▲舟水君、重い感じがあるが、筆意に乏しい、惜むべし。▲嵐堂君、極めて真面目の作。

第二十四回競書募集

- 一、課題 本號掲載の手下揮毫のこと
- 一、随意 臨書、白運尚れにてもよろし一人一枚
- 一、條幅 小畫仙半折大、書體隨意一人一枚
- 一、締切 九月五日嚴守のこと
- 一、發表 十月號本欄
- 一、送先 東京市品川区西品川三ノ八三一番地高橋白鷗先生宛送付のこと
- 一、注意 級位あるものは級位、所屬氏名雅號等を明記すること。新に應募するものは級位は新とすること

廣 東 名 府 水 名 府  
二 一 一 一  
刑 鳥 京 一 一 一  
級 級 級 級 級  
○ 遊 日 松 笠  
谷 高 倉 倉  
曉 翠 華 華  
山 泉 堂 堂

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
清芳嵐堂  
金光一  
足助秋鶴  
村上二  
宇田龍雲  
小田祐水  
龍田杏村  
齊地仙北  
舟地水  
伊藤常春  
竹内雲洋

八元 月年	將至及 其所之	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折
魏故中 書監使	池冷水 無三伏	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折
良辰美 景追随	儀有象 蓋聞二	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折
辰宿列 張寒來	敦惠愛 以為心	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折	柔則存 柔則存	罰者折 罰者折



道 書

水府花岡  
戶中刑崎  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
小井德安  
以下略 林忍一規

長鳥橫香水橫帶豐廣  
崎取濱刑戶濱廣刑刑  
五級  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
吉坂松壹富小柳大翠  
野田原野宅  
光廣勝芳提  
繁壽政三澤明石郎響

名府水名 金網新  
拘刑戶刑 隨 州刑州  
○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○  
通笠見松 村堀玉  
木倉川浦 以上清利  
黨華秋竹 以下政八等  
洲堂翠巖 助略



刑政歌壇

當季雜誌 每月五日限 業書一葉三首

白井大翼選

體當り誰か子なるらむ皇軍のつねの戦果に絶ゆることなし
聲あらく叱りし我は老囚のつむり白きに心悔ひつゝ
日をよぎる雲大きければ思はぬに麥を打つ身のしばし涼しき
南ゆく男の子の如し六月の瑠璃大空に羽叩く鳥は
たむろせる黒雲さきてさし照す入日はつよくわれに注げり
安らげき心たもちてひねもすを過しし夜は何かたのしき
親は死にて子兎残るとやにさす日はうすうすに桐の落ち花
男體山の雪解の風のあたゝかく穂麥大きく波打ちてをり
巡視しつゝ空房のぞけば窓越に二つ三つ見ゆる曉の星
昨夜の雨種蒔すみしばかりなる苗代越しにあふれしむ
ねやにきく雨静かなる朝ほらけ開古鳥なくこゑもまじれり
押花を季節はづれて送りしに喜び来る雨の便り

さし初めし潮に甘へて小魚の群れ交ふ水面朝陽映り透く
囚等群れ作業いそしむ青野原雲雀なきつゝ空にとび交ふ
白こんめ眞盛り咲ける花垣の家ぬちにももの縫ふ人のよろしも
遠蛙鳴ける夜頃を獄屋にても書き居れば心澄み行く
ささやかな囚の庭にも萌えそめし日輪草の花の頃待つ
友軍機導き了へしとき既に油はつきて玉と散りけむ
空へゆく只一筋の路のごと煙しづかにのぼりゆくかも
銃とらぬ我れにはあれど兵士に劣らじものを銃後かためて
鮮やかにみどり増したり楢若葉事務につかれし眼に清らかに
ひぐらしの聲のうちより暮れそめて山邊の諷涼しくもあるか
育ち行く我が子見る度思ふかな育てゝくれし恩の深さを
若草の芝生の上に深々と仔牛はヂット腹俯ひて居り
花散りて青葉さゆらぐ圓山にふくみそめたる白梅の花
君故に再び燃ゆる胸の火をさびしく消して嫁ぎゆく人
夕陽さす窓邊に立ちてながむれば連なる峰に霞かゝれり
紙袋きせ了りつつ梨畑によきみのりをぞ祈る夕ぐれ
海添に静もれる村おとなへば蜜柑の花のにはいなつかし
軒かけて飄へちまの憂逼はせずがくしくも窓開けて居り
皇軍の苦戦を偲びまごころをこむる非番の夜學尊し
つとめ了へて歸へりし部屋の文机にアネモネの花散りてありける
いまだ見ぬ歌人ながら逝くときけばなにか慕はし著書開きつつ
砲聲が絶えし野づらの月の出に故國を忍ぶ敵の塹壕
雨霽れて朝日昇らんとす大峰に残れる雪のかすみでぞ見ゆ
新緑の木蔭に憩ふ將兵の陽焦げし顔に感謝湧きくる

Table with 4 columns: Location (e.g., 名古屋, 八日市場), Author Name (e.g., 小川太一, 井上忍), and other details.

新刊紹介

田園の詩人達 岩倉政治著
著者の故里への思慕と農村生活に關する愛着の書である。
一圓八十錢 六興商會出版部
藤田東湖傳 高須芳次郎著
東湖先生は幕末非常時の光明たりしのみならず、また現代非常時の光明である。先生が生活した時代に於ける困難は今日以上であり、その努力も亦今日に倍するものがあつた。而もよく之に打勝つた先生の行路は、直ちに現下の非常時に向つて多大の教訓を垂れ、激勵の力を與へる。著者は本書に於て東湖先生崇拜の熱情を抱いて在來の東湖傳以外に新生面を開かれたのである。
二圓八十錢 誠文堂新光社
自然・人間・書物 安倍能成著
自然に對する印象、人間に對する回

想、書物に對する批評等が著者の滋味に富んだ筆致の中に、綴られてゐる。因に著者は第一高等學校長の現職にある人。
二圓八十錢 岩波書店
歌集四天雲晴 齋藤瀏著
本書は昭和十四年以降、大東亞戰爭勃發直後までの作品八百餘首を收めたもの。「波濤」に次ぐ著者の第四歌集である。
二圓 東京堂

芭蕉の全貌 改訂版 萩原蘿月著
本書は詩人芭蕉の生涯と作品の全般に亘る著者十年の苦心の結晶である。芭蕉文獻の最高峰を往く良書である。
七圓 三省堂
旬日記 高濱虚子著
著者の最近數年間の俳句全部を収録せるものにして、作句家必讀の良書。
三圓九十錢 中央出版協會

# 東

## 友道 (接前)

叙上、友道はかうあるべしといふ意を述べたのであるが、一般に友達といつてゐるのは、さる意ではないので、單に唯對等に交際してゐるものを友達といふのである。かくの如き友達は、到底苦みを共にし樂みを分つことが出来得ない、假令友達の義理を盡すことあるも、友達の人情を盡すことあるも、純乎たる友道に立脚した友達とは嚴密に區別されねばならない。尤もさる親友は比較的眞友に近い交際であるだけに、この程度に在る友達でも、實際容易に得難いものであることは言ふまでもない。曲亭馬琴は、名著「椿説弓張月」中に、『歡樂には他人も集り、憂苦には親戚も離る』と書いてゐる。殊に世智辛い現代に在つては、一般人心大率拜金宗と化し、貧富貴賤の變化に依りて交友關係も之に伴つて變化し、昨日の眞友は今日の眞友でない。在昔支那の戰國時代に、蘇秦といふ逸材があつた。彼は「これ一人の身、富貴な

# 洋

れば則ち親戚も之を畏懼し、貧賤なれば則ち之を輕易す。況んや衆人をや。」と嘆息した。唐の大詩人張謂は『世人交を結ぶに黄金を須ゆ、黄金多からざれば交も深からず、たとへ然諾して暫く相許すも、終にこれ悠々たる行路の心』と吟じた。曾てはいつまでもと誓つた親友も、その誓友が貧乏化すれば、反復、言を左右に託して遠ざからんとするのが常例である。『落ちぶれて袖に涙のかゝるとき人の心の奥ぞ知らる』といふ古歌もこの場合に思ひ出される。されば自身と友達の運命か、一方を益々富まし、一方を愈々貧うするに至るときは、一般人が末頼もしい友達と思ひ込んでゐたものさへも、過ぎて見れば一時的幻影に過ぎず、眞友として最も價値ある眞實と信用を有せざる眞友に似て非なる友達であつたといふことになるのである。但、世に處し人に接するには、かゝる同志でも尙ほ持たざるに優るが故に、吾人は之に對して羨き満足を以て、眞

# 訓

友に盡す道と同一の行き方で交誼を致すべきである。理想的眞友の標本としては、古代から史乘に名高い管鮑の交を提供したい。支那春秋時代、諸侯を九合し天下を一匡した齊國出身の管夷吾(管仲)と鮑叔牙(鮑叔)の交情は、即ちこれである。鮑叔は曾て管仲と共に商賣した。その時管仲は鮑叔をだし抜いて利益分配を壟斷した。鮑叔はその壟斷事實を知りつゝその不正に對してすこしも咎め立てしなかつた。それは管仲の貧困から止むを得ず出たことと信じたからであつた。又、鮑叔は管仲と共に企業した。その時は管仲の進言を聞いたばかりに、ひどく失敗したことがあつた。鮑叔はその企業不明に對して少しも不信を起さなかつた。それは時に利と不利あるを考へたからである。又、鮑叔の爲に出でて戦つたことかあつた。その時は三たび戦つて三たびも敗れ、甚しく威信を墜した。鮑叔はその臆病怯法に對しても、敢て責問しなかつた。それは管仲

## 佐伯復堂

に孝養すべき老先短母親があるからその心情を忖度したのであつた。かくの如くにして管仲は深く鮑叔の知己を喜び『我を生むものは父母、我を知る者は鮑子(鮑叔)なり』といつて、鮑叔の恩を父母の恩に對稱感謝するに至つたのである。爾後、齊國に内亂起り、管子は鮑子と敵味方に分れ、管仲は囚はれの身となりしとき、鮑叔のとりもちにより一躍して、齊國の宰相(總理)となり、遂によく支那統一の覇業を大成した。鮑叔自身成り得る將相とならずして、敵囚管仲、眞友管仲を推薦したことは、寔に一片耿々國を念ふ至誠の心に燃ゆる大人格者でなければ出来難いことである。鮑叔なければ管仲なく、管仲なければ鮑叔なし。この意味に於て持つべきものは眞友である。

# 話

正誤 前號友道の二段、「便佞を友とするは損なり」は「便佞を友とするは損なり」の誤につき之を正す。

## 監獄法新舊比照 (四)

田中茂雄

### 第七章 給養

法第三十二條 受刑者ニハ一定ノ衣類器具ヲ着用セシム但拘留囚ニハ自衣ノ着用ヲ許シ其他ノ者ニハ襦衣ノ自辨ヲ許スコトヲ得

#### 明五懲役第十一條 衣食

獄衣ハ柿色ノ短衣、窄袖、股引ヲ用フ婦女ノ衣ハ其袖未決者ヲ除クノ外皆之ヲ着セシム未決者ヲ除クノ外ニ番號アリ墨字ヲ以テ第幾令名第幾百幾十番ト記ス  
准流ノ者ハ番號背ニ在リ徒以下ノ者ハ胸ニ在リ、股引モ亦左足ニ獄名ヲ記シ右足ニ居房ノ番號ヲ記ス  
其裁縫指字皆輕役人ヲ使用ス番號指字ハ四式第十

暑中ハ單衣一枚トシ春秋ハ袷一枚トシ冬時ハ綿入ヲ加ヘ三枚トス單衣ハ三日毎ニ之ヲ洗ヒ襦袴ハ五日毎ニ之ヲ洗フ

外役ノ間ハ別衣ヲ着シ歸獄スレハ衣ヲ更ヘシム包藏物ヲ豫防スル所以ナリ  
獄衣更換ニ期限アリ市品ノ種類強弱ニ因テ限滿レハ新衣ニ換フ安リニ之ヲ汚損スル者アレハ罰則ニ從フ  
獄丁其管下ノ獄衣ヲ検査スルコト七日毎ニ三次トス  
各犯罪已ニ決スレハ之ニ獄衣ヲ與ヘ從前ノ衣服ハ獄官之ヲ領置シ放縱ノ日之ヲ還付ス  
未決ノ貧囚獄衣ヲ乞フ者アレハ之ヲ給ス  
夏時ノ臥具ハ毛布一枚席一枚トス冬時ハ毛布二枚草蓆一枚ト爲ス草蓆ハ粗布ニ高シ也

枕ハ杉ノ半圓木ヲ用フ式第十二枕衾ハ守卒毎朝輕役者ニ命シテ之ヲ検査シ汚損ナケレハ之ヲ一室ニ斂メ室中ニ各四房中ヲ掃除ス日暮又之ヲ出シテ各房ニ送ラシム  
病囚老囚ハ獄司醫卜議シ衾襖ヲ増

法第三十三條 刑事被告人及ヒ勞役場留置ノ言渡ヲ受ケタル者ノ衣類

#### 加スルコトアリ

明一四第六十三條 已決囚ノ獄衣類ハ總テ之ヲ貸與ス  
第六十五條 已決囚ノ獄衣ハ赭色トシ懲治人ノ衣服ハ淺葱色トス  
第六十六條 獄衣ハ總テ筒袖トシ長短二種ニ別ツ男ノ通常服ハ長衣、就役服ハ短衣トシ女服ハ總テ長衣トス、獄衣ノ外襟ニハ白布ヲ縫着シ之ニ番號ヲ墨書スヘシ  
第六十七條 在監人ニ貸與スル衣類雜具  
○通常服 一、單衣 一、衿 一、綿入衣 一、襦袴、  
○就役服 一、單短衣 一、衿短衣、一、綿入短衣 一、襦袴 一、股引  
○雜具 一、蒲團 一、蚊櫛 一、莞蓆 一、枕一帯(長三尺) 一、簾(長三尺) 一、手巾 一、蓆 一、笠  
以上ノ貸與品ハ地方ノ便宜ニ依リ之ヲ斟酌取捨シ漸進補綴シテ其用ニ充ルヲ得

明二二第二十六條 囚人及懲治人ノ衣服器具ハ之ヲ貸與ス 但拘留囚ハ自衣ヲ著スルコトヲ得

法第三十四條 在監者ニハ其體質、健康、年齡、作業等ヲ斟酌シテ必要ナル糧食及ヒ飲料ヲ給ス

明一四第六十四條 未決者ノ衣類ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フ者ハ之ヲ許ス貧困ニシテ衣類ヲ自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

#### 明五 繫獄

未決者繫獄中ノ則目左ノ如シ  
一、(省略)  
一、獄衣ヲ着セス  
一、(以下省略)

明二二第二十七條 刑事被告人ノ衣服ハ總テ自辨トシ臥具ハ之ヲ貸與ス若シ臥具ヲ自辨セント請フ者アルトキハ之ヲ許ス赤貧ニシテ衣類ヲ自辨スルコト能ハサル者ニハ之ヲ貸與ス

明五 繫獄 (前略)  
未決者繫獄中ノ則目左ノ如シ  
一、食糧ハ五人ヲ一連ト爲ス内一



人炊事ヲ執ル五人輪炊五日ニシテ  
初メニ復ル 未決監及ヒ懲役石造ナラハ輪炊法  
ニ依リテ之ヲ用ユ若シ水災ノ恐レアラハ合炊  
法ニ依リテ之ヲ用ユ

**懲役第十條 食料**  
各犯ノ食料少差アリ懲役第五等ノ  
者ハ一日ニ米白麥合テ七合、第四  
等以上及ヒ殊藝並ニ懲治監ノ囚ハ  
同ク五合五勺、輕役、寛役及ヒ未  
決者ハ同ク四合、十歳以下男女共  
ニ同ク二合七勺 幸ハ獲キ割リテ用ユ炊爇ニ  
ヨリ用スヘシ 食料ハ未決已決ヲ論セ  
テ皆官費ト爲ス獄囚モシ其幼孩ヲ  
携シコトヲ願ヒ情實ノ已ムヲ得サ  
ル者ハ之ヲ聽シ亦官費ヲ以テ之ヲ  
養フ

監倉ニアル未決者ヲ除クノ外各囚  
ノ食料皆同シ朝夕ハ鹽菜別ニ一羹  
アリ晝飯ハ七日ノ間ニ野菜三次、  
鮮魚一次、鹹魚或ハ乾魚三次合シ  
テ七次ト爲ス 魚類ニ乏シキ地ハ牛、羊、豚  
ニ代  
ニ代  
毎日ノ定額左ノ如シ

- 一、肉類 價十文内外
  - 一、野菜 同上
  - 一、羹實 同上
  - 一、鹽菜 同上
  - 一、醬油 四勺
  - 一、茶 三勺
- (量目)

- 一、薪 二百十匁 (量目)
  - 常食ノ外加給ノ例左ノ如シ
  - 一、正月元日 二餅一魚
  - 一、三月十一日 一魚
  - 一、七月十五日 素麭三椀
  - 一、九月廿二日 一魚
  - 一、十二月廿五日 同上
- 病囚ノ食ハ醫ノ言ニ從ヒ價値ヲ論  
セス

**明一四第六十八條** 在監人一人一日ノ食糧

- 一、下白米十分ノ四、挽割麥十分ノ六、七合、強キ力菜ニ服スル者
  - 一、同、同、五合、輕キ力菜ニ服スル者
  - 一、同、同、四合、工役ニ服セサル者及ヒ滿十歳以上ノ未決者
  - 一、同、同、三合、十歳未滿ノ幼者
  - 一、菜、金一錢五厘以下
- 地方ノ便宜ニ依リ粟稗ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルコトヲ得

**明二二二十八條** 囚人及懲治人一人一日ノ食糧

- 一、下白米十分ノ四七合乃至八合
  - 最モ強キ作業ニ服スル者
  - 一、同、五合乃至六合
  - 作業ニ服セサル者
  - 一、同、四合
  - 一、同、三合
  - 十歳未滿ノ幼者
  - 一、菜、金一錢以下
- 地方ノ便宜ニ依リ粟、稗、黍、薯ノ類ヲ以テ麥ニ代用スルコトヲ得
- 又麥、粟、稗、黍等ニ乏シキ地方ニ於テハ内務大臣ノ認可ヲ經テ下白米ノミヲ給スルコトヲ得
- 刑事被告人モ亦前項ニ準ス 但自費ヲ以テ食物ヲ購求セント請フトキハ之ヲ許ス

**法第三十五條** 刑事被告人ニハ糧食ノ自辨ヲ許スコトヲ得

**明五 繫獄**

未決者繫獄中ノ則日左ノ如シ  
(前略)  
一、其親戚ヨリ衣食ヲ贈與セント請フモノアレハ之ヲ聽ス 但シ食物ハ醫ヲシテ検査セシメ衣服ハ包

藏物ヲ嚴查ス (以下略)

**明一四第六十九條** 工業ニ勉勵シテ食費ヲ償フヘキ工錢ヲ得ル者及ヒ其幾倍ヲ得ル者等ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得 但一日金三錢ヲ過ルコトヲ得ス

定役ニ服セサル者ニハ其請ニ由リ領置シタル工錢ヲ以テ食物ヲ購ヒ之ヲ給スルコトヲ得 但一日金五錢ヲ過ルコトヲ得ス

**第八十九條** 未決者及ヒ懲治人ニ其親屬故舊ヨリ書籍、用紙、衣服、臥具又ハ飲食物(炊爇ヲ要セサルモノニシテ一人一食ノ量ニ限ル)ヲ贈ラント請フトキハ之ヲ許ス、但酒又ハ煙草其他攝生ニ害アルモノハ此限ニ在ラス

現行監獄法ニ該當條文ナキモノ

**明一四第七十條** 在監人日用ノ雜費  
(澆灌補綴又ハ炊用ノ薪炭其他一身ニ係ル日常諸費) 一人一日金一錢二厘以下トス (以下次號)

**例規**

自五月十六日  
至六月十五日

**訓令**

**臨時手當支給規程中改正ノ件**  
(昭和十七年六月三日)  
(會甲第三四九二號)  
臨時手當支給規程中左ノ通改正シ昭和十七年四月一日ヨリ之ヲ適用ス  
第一條中「副看守長及看守」ヲ「副看守長、看守及教導」ニ改ム  
第二條及第四條中「副看守長又ハ看守」ヲ「副看守長、看守又ハ教導」ニ改ム

**通牒**

**昭和十七年度歳出支科目ニ關スル件**  
(昭和十七年五月二十三日)  
(行甲第九四號)  
標記ノ件ニ關シテハ客月八日會甲第二四五五號ヲ以テ訓令相成候處經常部刑務費ノ款、收容費ノ項護送費ノ目中第四節備入諸費ノ次ニ通信費ノ節ヲ設ケ御處理相成度候  
巡査傳給諸給與並看守收入其  
他調査提出方ノ件  
(昭和十七年五月廿七日)  
(行甲第九〇五號)

標記調査別表様式ニ依リ作成ノ上來ル六月三十日迄ニ到達スル様提出相成度候  
追テ本調査ハ爾今毎年五月末日迄ニ

提出相成度尙別表中前年度或ハ現年度トアルハ調査作成日ヲ規準トスルモノニ有之候

**第一表**  
昭和何年度巡査傳給諸給與豫算調

豫算種目	人員總豫算	一人當リ	摘要
給	年額	平均年額	
宿			
被服代料			
何々			
何々			
計			

家族數	人員	收入金額
一 獨	一人	計
二 二人	二人	計
三 三人	三人	計
四 四人	四人	計
五 五人	五人	計
六 六人	六人	計
平均計		

一、本表ハ前年度中滿一ケ年ヲ通シテ看守ニ在職シ更ニ現年度四月末日現在ニ及ブ者ノミニ付調査スルコト  
從テ右期間ノ中途拜命者又ハ雇員其他ヨリ看守ニ轉シタルモノヲ除外シ之等ノ者ハ中途拜命者ト中途看守ニ轉シタルモノニ區分シ末尾備考トシテ其ノ人員ヲ掲記スルコト  
二、記載注意事項  
イ 本人ノ傳給諸給與欄ニハ本人ノ俸給加俸賞與宿料、被服代料其ノ他ノ諸手當(特別手當勤勉手當、家族手當臨時手當等)ニ付支出官ヨリ支給ヲ受ケタル金額ヲ掲記スルコト  
ロ 同上以外ノ本人收入欄ニハ本人ノ收入トナルヘキモノ例ヘハ貸地貸家賃恩給其他一切ノ收入金額ヲ掲記スルコト  
ハ 家族ノ内職其他收入欄ニハ家族ノ

一、巡査部長、巡査ニ區分計上セルモノハ總テ之ヲ合算スルコト  
二、警部補ニ付テハ本表ニ準シ別表トシテ作成スルコト  
三、精勤加俸功勞加俸、特別手當附料等豫算ニ計上シアルモノハ總テ豫算種目別ニ掲記シ傳給ニ加算セサルコト  
四、府縣市町村等ニ依リ豫算ニ區別アル場合ハ刑務所所在地區ニ相當スル豫算ヲ掲記シ其ノ他ノ部分ハ參考トシテ別表ニ記載スルコト  
五、看守又ハ看守長ノ配賦豫算ト對比上參考トナルベキ事項ハ摘要欄ニ詳記スルコト  
六、本表ハ現年度ニ付調査ノコト  
第二表  
自昭和何年四月看守傳給其他收入額調  
至昭和何年三月 何刑務所

一、本表ハ前年度中滿一ケ年ヲ通シテ看守ニ在職シ更ニ現年度四月末日現在ニ及ブ者ノミニ付調査スルコト  
從テ右期間ノ中途拜命者又ハ雇員其他ヨリ看守ニ轉シタルモノヲ除外シ之等ノ者ハ中途拜命者ト中途看守ニ轉シタルモノニ區分シ末尾備考トシテ其ノ人員ヲ掲記スルコト  
二、記載注意事項  
イ 本人ノ俸給諸給與欄ニハ本人ノ俸給加俸賞與宿料、被服代料其ノ他ノ諸手當(特別手當勤勉手當、家族手當臨時手當等)ニ付支出官ヨリ支給ヲ受ケタル金額ヲ掲記スルコト  
ロ 同上以外ノ本人收入欄ニハ本人ノ收入トナルヘキモノ例ヘハ貸地貸家賃恩給其他一切ノ收入金額ヲ掲記スルコト  
ハ 家族ノ内職其他收入欄ニハ家族ノ

**第三表**  
家族收入額調

區分	官舎居住者	官舎外居住者	計
一人	一人	一人	一人
二人	二人	二人	二人
三人	三人	三人	三人
四人	四人	四人	四人
五人	五人	五人	五人
平均計			

給料	貸家賃	何々	合計
備考	一、本表ハ看守家族ノ内職及營業其他ニ依ル前年度中滿一年間ノ収入金額ヲ掲記スルコト	二、内職及營業其他ノ収入ノ細目ハ特ニ奇異ナルモノニ付テハ其他トシ集計シ他ハ各種目毎ニ記載スルコト	三、人員欄ハ各家族ヲ通シ就業人員ヲ計上スルコト
備考	一、本表ハ看守家族ノ内職及營業其他ニ依ル前年度中滿一年間ノ収入金額ヲ掲記スルコト	二、内職及營業其他ノ収入ノ細目ハ特ニ奇異ナルモノニ付テハ其他トシ集計シ他ハ各種目毎ニ記載スルコト	三、人員欄ハ各家族ヲ通シ就業人員ヲ計上スルコト
備考	一、本表ハ看守家族ノ内職及營業其他ニ依ル前年度中滿一年間ノ収入金額ヲ掲記スルコト	二、内職及營業其他ノ収入ノ細目ハ特ニ奇異ナルモノニ付テハ其他トシ集計シ他ハ各種目毎ニ記載スルコト	三、人員欄ハ各家族ヲ通シ就業人員ヲ計上スルコト

平均	備考
備考	一、本表ハ應召ニ依ル休職看守家族ニシテ獨立ノ生計ヲ維持シツツアルモノニ付調査スルコト
備考	一、本表ハ應召ニ依ル休職看守家族ニシテ獨立ノ生計ヲ維持シツツアルモノニ付調査スルコト
備考	一、本表ハ應召ニ依ル休職看守家族ニシテ獨立ノ生計ヲ維持シツツアルモノニ付調査スルコト

計	備考
備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト
備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト
備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト

區域外居住	備考
備考	一、本表ハ宿料ヲ支給セサル看守ニ付調査スルコト
備考	一、本表ハ宿料ヲ支給セサル看守ニ付調査スルコト
備考	一、本表ハ宿料ヲ支給セサル看守ニ付調査スルコト

下宿料別人員	備考
備考	一、本表ハ下宿生活中ノ看守ニ付調査スルモノニシテ賄付ノモノハ賄料ヲ除外シタル金額ヲ下宿料ト看做シ記載スルコト
備考	一、本表ハ下宿生活中ノ看守ニ付調査スルモノニシテ賄付ノモノハ賄料ヲ除外シタル金額ヲ下宿料ト看做シ記載スルコト
備考	一、本表ハ下宿生活中ノ看守ニ付調査スルモノニシテ賄付ノモノハ賄料ヲ除外シタル金額ヲ下宿料ト看做シ記載スルコト

平均	備考
備考	一、本表ハ下宿生活中ノ看守ニ付調査スルモノニシテ賄付ノモノハ賄料ヲ除外シタル金額ヲ下宿料ト看做シ記載スルコト
備考	一、本表ハ下宿生活中ノ看守ニ付調査スルモノニシテ賄付ノモノハ賄料ヲ除外シタル金額ヲ下宿料ト看做シ記載スルコト
備考	一、本表ハ下宿生活中ノ看守ニ付調査スルモノニシテ賄付ノモノハ賄料ヲ除外シタル金額ヲ下宿料ト看做シ記載スルコト

刑務官異動	備考
備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト
備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト
備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト

備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト
備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト
備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト
備考	一、本表ハ看守全部ニ付調査掲記スルコト



新機軸「委員制」

多年の懸案や戦時下にふさはしい新しい試みが行政部門に相次いで實行されて行くことは誠に心強い。中間行政機關「地方事務所」の設置がそれであり、行政簡素強化力のための官吏減員また然り。更に内閣及び各省委員の設置にせよ、何れも官界新體制の具體的進展として注目される。就中委員制は、官民協力體制の強化と行政能率の増進をめぐす劃期的な構想である。委員は貴衆兩院議員・民間有識者から選ばれ、その數三百五十餘名に上る。これが内閣及び各省（陸海軍を除く）に配置され廳務を輔けるのであるが、従来の委員會制度の如く委員長を置く會議體でなく個人諮問を原則とし、登壇、服務、參集等も各省の特殊性

に應じて自在な弾力性ある運営方針を採つてゐる。従前の政務官、參政官制度に代る新しい民間人の行政參與の様式であり、その活用如何によつては各廳の政治的幕僚の働きを爲し、その成果は大いに期待される所である。

調査の洪水

政府は右の委員制の活用と脱み合せて、各種委員會、調査會の整理改廢に着手したがこれまた刻下の急務である。何となれば、既に先年この種の諸機關を整理したにも拘らず、まだ二百に及ぶ各種委員會が現存するからである。しかも今回翼賛政治會に政務調査會、大政翼賛會に調査會が夫々設けられた。前者は更に各省別調査委員會に分たれ、後者は十の委員會に分たれる。その外各官廳、公共團體、學校等に附屬する調査機能に至つては無數であり、正に調査研究の氾濫である。而してそれ等が互に重複した調査を行ひ、資料をめぐる煩しい努力が徒費されて居り、國家的見地から見て甚だ無駄が多い實情にある。この際政

府の委員制と翼政の政務調査會、翼賛會の調査會が三者一體となつて互にその機能を分擔して綜合國策調査の實をあげることは大東亞戰下緊要な課題となるのである。

今更笑止な日本再認識

デマと樂觀論に踊る米輿論も、太平洋を縦横に疾驅更に米本土を襲ふ皇軍の威力に歴倒され漸く日本再認識論が擡頭し出した。東亞通として名を賣る米評論家エドガー・スノーは、米國敗戦の根本的原因として、日本をみくびつてゐたことを擧げてゐる。即ち「我々が眞の敵に非ずと認め

ニエル・ベツプアも「日本は歐洲大戰や支那事變より幾多の貴重な教訓を獲得した偉大な戦争老練家といふべきで、これを輕視したのは全然失策といふほかない、日本人は武士道的傳統に育くまれ、戦に臨んで死を惜まざる觀念は到底歐米人の匹敵し得るところでない」と兜をぬいでゐる。これ等は、戦争によつて日本が早晩崩壊する如く思ひ込んでゐる米人としては少しはもの判つた方であり、たゞその判り方が遅つただけである。

苦難と光明のインド

何とかしてインドを戦火に捲き込まうとすればするほど印度は英國から離れ且つ英國に對して立ち上つて行く。歴史の必然とは云へ英國にとつて之ほど皮肉なことはない。英人の完全撤退を要求するガンデーは「米英兩國は人間の權利に對し彼等が従來行つて來た醜惡な犯罪から手を洗はぬ限り人間の自由を付いて歸

ることは出来ない」と痛論し又親英的と宣傳しガンデーとの離間を策されてゐたネールもガンデーと完全に意見が一致した。更に印度教派と回教徒聯盟が、その合同會議において兩派團結を宣言したことはいよいよ、以て英國の顛落を速めるものである。實に分割統治は英國の常套手段であり、この兩派の宗教的對立を巧みに醸成しこれを利用して、三億の印度大衆を支配して來たのであつた。他方パンコックに開かれた印度獨立大會も、印度を戰禍の巷から救ふ唯一の道は英との關係を即時に斷絶し完全に獨立する以外にないことを決議し、印度國內に於ける國民的指導者の運動を支援することを誓つた。かくて大東亞戰爭下印度の獨立運動は新しい第一步を踏み出すに至つたが英國の興廢を決する鍵は印度にあり、印度人の印度が生れるまでには尙前途に苦難多きしかし輝しい途が續いてゐるのである。

昭和十七年 刑政日誌

- 五月二十三日 △行甲第八九四 號昭和十七年度歳出支出科目ニ關スル件通牒
五月二十五日—三十日 △全國司法長官會同開催（於司法省會議室並法曹會館）
五月二十七日 △行甲第九〇五 號巡查俸給諸給與並看守收入其他調査提出方ノ件通牒
六月三日 △會甲第三四九二號 臨時手當支給規定中改正ノ件訓令
六月三日—五日 △全國刑務所長會同開催（於司法省會議室並大臣官舎）
六月四日 △行甲第九六二號構 外作業附帶經費計算高算定方
六月四日 △行甲第九六二號構 護委員事務局長會同
六月十三日 △午後二時刑務協 會講堂ニ於テ映畫會

編輯後記

本月は種々會同の多い月であつた。就中、刑務所長會同は、われわれ行刑に携はる者にとつて、最も大きな關心事であつたことは謂ふまでもない。本號には、いろいろな關係からその代表記録として、會同初日に於ける大臣訓示等を収録するに留めたのであるが、たゞ、われわれは、本篇に依つて、その示唆する處を、よく把握し、之を躬行することこそ絶対に必要であることを忘れてはならないのである。切に讀者の熟讀含味が要望される。

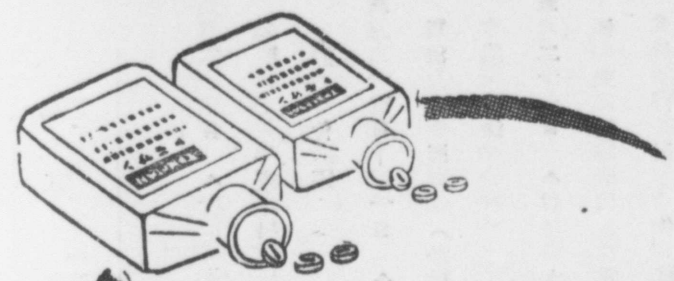
本月號を通じて、特に論稿の貧弱が氣懸かりに思はれる。編輯者の机上に、數多、部内諸氏の貴重な勞作を戴きながら、紙面の制限などに煩ひされて、之を收揚出来なかつたのは、洵に遺憾の極みであるが、上述所長會同の記事が之に代るものとして、大方の宥恕を乞ひ度い。部外執筆者は、一流名家揃ひで、この點、必ずや他雜誌の追隨を許さぬ處、かへり見て、まだ草創の時代にあるべき筈の本誌が、既に、堂々他に伍して居るのは、ひとへに、部外諸家の御支持に依るもの、御多忙の中を懇切に御援助

Table with 2 columns: Issue/Volume and Price. Includes details for '一冊(税共) 金三十錢' and '六冊(税共) 金一圓八十錢'.

下さる諸家には、全く感謝の言葉も見當らない。
御注文は總て前金のこと
御送金は郵便爲替ならば司法省郵便局取扱にて拂込のこと、但しなるべく振替を利用せられたし、口座は東京二五〇五九番刑務協會とすること
御注文の際は必ず送付先明記のこと、從つて轉居の際は新舊住所を御届け下さい

明治二十七年二月二十六日第三種郵便物認可
昭和十七年六月二十八日印刷 納本
昭和十七年七月一日發行
編輯兼發行所 大原 虎 夫
兼印刷所
配給元 日本出版配給株式會社
印刷所 刑務協會印刷所
發行所 刑務協會

# 胃腸が弱く



健康勝れず  
體は痩せて  
元氣がなく  
疲れ易い人

かうした人は兎角、消化とか榮養とかに頼つてゐますが、それでは却つて胃腸自身の働きの鈍つてきます。それよりも先づ積極的に胃腸を強化し、何でも食べて自力で消化吸収するのが根本です。

## 最新の

胃腸薬トモサンとは、すなはち此の點に着眼して創製されたもので、獨特の被覆吸着作用によつて、胃腸の粘膜に生じてゐるカタルとかタダレをちやうど創薬のやうに被覆治療して胃腸を丈夫にし、さらに胃腸内の毒素、腐敗酸、酵物、有害細菌を吸着殺菌して胃腸内を清掃するのが特長です。弱い胃腸も自然に働き出し、消化吸収の自力作用が活潑となるので、頗る好評です。

# トモサン

七〇センチ・一圓五〇  
三圓七〇・薬店にあり  
トモサン  
設廠 東京  
東京市日本橋區本町三丁目  
販賣元 友田合資會社